

トゥルニエ『気象』逸脱する存在をめぐって

岩松, 正洋
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9936>

出版情報 : Stella. 11, pp.1-62, 1992-06-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

トゥルニエ『気象』における異形¹⁾

——逸脱する存在をめぐる——

岩 松 正 洋

ミシェル・トゥルニエは、第3長篇『気象』(1975年)に、共同体の秩序からのさまざまなかたちでの逸脱を体现する人物を多数登場させている。あるものはユダヤ人であるらしいということ、あるものは性的に倒錯していることで、またあるものは下層階級に属していることで、さらにあるものは精神を病んでいることで、社会から排除される運命にある。もちろん、こういった人物の多用は『気象』にかぎったことではなく、トゥルニエのほとんどの作品につうじる特徴ではある。しかし『気象』のばあい、それが登場人物のみならずさまざまな事象にまでおよんでいる点が、ひとときわ注意を喚起する。ゴミや汚物、忌避の対象となるある種の動物などがそうであり、このことが、さながら逸脱し排除されるもの(者、物)についてのスキャンダラスな百科全書とでもいうべき様相を『気象』に帯びさせていることを否定はできないだろう。総じて「異物嘔吐型」社会である西欧近代社会²⁾によってこれらのものは共同体の外部へと駆逐されてきたのだが、その排除のなかには、この世ならぬものへのおそれという原始的心性が核として存在している。こういったこの世ならぬもの=怪物や超常現象³⁾を特徴づけるのは「異形」という側面であろう。倒錯者や異端者への忌避は、異形や異能へのおそれの文化的な変形にすぎないのである。

その観点から『気象』を読むにあたって、主人公のひとりポールがみずからの内なる異形と遭遇する原体験が描かれている箇所が存在する、という指摘をしておこう。ひとつは、聖ブリジット学園の心身障害児たちとの交流という、幼年期の記憶に横たわる体験である。こちらでは、内なる異形との遭遇は共感というかたちでゆるやかにこなわれ、原体験というより原風景というべきものとなっている。もうひとつはポールが「縁日の洗礼」と呼ぶ劇的な体験である。ここで彼は、じぶんたちが神話的雙生児という異形であるということのをそれまでになくつよく自覚して、強烈なショックをうけるのだ。

『気象』では雙生児そのものが「この世ならぬものたち」として語られてい

る。そのイメージは過剰なまでの、一見したところ矛盾すれすれの多様性をもって作品の各所にさまざまな表象として噴出している。それらの表象に通底するこの世ならぬものたちとしての双生児とはなにか。『気象』の主人公である双生児を、神話的な「この世ならぬもの」ははたしてどのように囲繞しているのだろうか。そしてそれらの表象は、幻想文学⁴⁾における異形の流れのなかで、どういうふう位置づけられるのだろうか。

I 心身障害児たちの異形と異能

1. 排除された愚昧と狂気

『気象』の主人公はブルターニュに住むジャンとポールのシュラン兄弟である。小説冒頭の1937年に7歳になるこの双生児は非常識なまでに酷似しており、父エドゥアールにすら区別がつかない。彼らはふたつの身体にひとつの人格をもつ神話的双生児であり、ふたりで閉じた回路をつくって外部を遮断し、不毛で幸福な全人格的自足状態にある。ジャンとポールの兄弟というより一体に「ふたごのジャン=ポール」としてあつかわれているのだ。シュラン家の住居はラ・カッシヌと呼ばれる。となりには聖ブリジット学園という心身障害児の養護施設とエドゥアールの所有になる織物工場とがおなじ敷地をわかちあっており、レ・ピエール・ソナントと称するそのあたり一帯の三位一体をなしている。聖ブリジット学園にたいしては、小説の第3章「無垢なるものたちの丘」の全体がさかれ、そこで語られていることが、第2次世界大戦をへて1961年のベルリンの壁建設にいたるこの作品の原風景として機能しているようである。

この学園は、同心円にも似た、だんだん範囲をせばめていく4つの部分から成立していて、中心にむかうほど子どもの障害の度合いが大きくなる。養護施設への、やや残酷な等級制度のこの導入はなにを語っているのだろうか。即座に想起されるのは、ダンテの『神曲』地獄篇の舞台となる、同心円状に層をなす地獄である⁵⁾。そこでは、下層へおりてゆけばゆくほど死者たちの罪は重く、罰もきびしくおそろしいものとなる。するとここでは、学園の子どもたちが共同体から断罪され、排除されていることが強調されているのだ。『精神疾患と心理学』や『狂気の歴史』などミシェル・フーコーの初期著作にもあきらかなように、「愚者」や「狂人」が「精神障害者」にすりかえられるとき、異物にたいする社会の態度には重大な転換がおこっている⁶⁾。『気象』では、た

たとえば2番目の円に属する子どもたちについて、以下の記述をみることができよう。

すこしまえの時代だったら、彼らは村社会のなかに居場所を見つけただろう。そこなら「バカ」はむかしながらの、容認されるばかりかだいにされる人物像で、ちょっとした畑仕事や庭仕事で役に立ったものだ。彼らは、経済・文化の生活水準の向上このかた廃物とされ、学校教育が普及するやいなやその存在を検出され、共同体からもじきに村八分にされ、周囲に虚無の壁をつくられてみじめな境遇に追いやられたのである。管理され合理化・機械化された攻撃的な社会に、うなり声をあげ、ばたばたと足踏みし、からだをゆすり、うすら笑いを浮かべ、横目でにらみ、よだれや糞尿をたれ流すことで応じるしか、彼らには道がなかった。社会が彼らを廃棄したのとおなじくらい彼らも社会を否定していた。[49]

ここにある「バカ (bétion)」ということばは、愚直さをきわめることで常識を超えた知恵をもつ「イヴェンのバカ」のような痛快な人物類型につながっていたはずである。豊饒な意味を背負った患者から、道化や聖者の側面⁷⁾が臨床医学にのっとなって剝奪され、ただ劣等のもんとして排除されるとき、患者にそなわった多義性はうしなわれ、共同体は硬化する。フランス語の fou が「狂人」や「愚者」とともに「宮廷道化師」の意味をもつこと（英語の fool も愚者、道化）や、ギリシア古典文献学者として出発したニーチェの狂気がソクラテスのダイモン（鬼神）やディオニュソス信仰の「宗教的狂気」に共感をもってつながることなどをおもえば、ブルジョワ社会での精神障害へのまなざしが、普遍的な絶対のもんでもなく、不変のもんでもないのはあきらかになろう。では『気象』では、これら患者たちの存在はどのようにあつかわれているのだろうか。

2. フランツの異能

説話には洋の東西を問わず、愚者としてさげすまれながらも、異能とでもいうべき力を賦与された人物が登場する。運の強さ、肉体的な力、SF 的な超能力などとならんで代表的なものに「真相を見ぬく力」がある。この力は「愚者の知恵」とよばれておそれられ、また愛されてもいる⁸⁾。「愚者の知恵」は『痴愚神礼賛』や『ガルガンチュワ物語』を生んだ、きわめて重要な概念なのだ。説話論的な還元をほどこせば、彼らは「なにかの力をうしなったために超能力を得た存在」⁹⁾で、この公式は『気象』を支配している。異能はかならず

なにか障害とひきかえにあたえられる——「なにか超人的な天賦の才をかがやかしく発揮する異常や畸形，こんな例外的なケースがどんな宿命を持つか，ここですこし触れることができる。この優秀さは，いちばんあたりまえの基本的なことができないという重大な欠陥とひきかえに得たものだ」[156]。じっさい，ポールはパートナーであるジャンをうしない，最後には半身不随でうごけなくなってしまうが，世界のあらゆるところに「遍在」することを許されるのである。

『気象』第1，3章で幼いジャンとポールの同い年の親友としてあらわれる，聖ブリジット学園の障害児フランツも，コミュニケーションの能力とひきかえに異能をさづけられたある種の超能力者だ。しかしその偏執狂的な異様さと大きさにかかわらず，その力は心理学者の興味をひきマスコミをさわがせる程度のことになってしまう。フランツはマティニョンの専門訓練センターにおくられると性格が悪化し，しかたなく聖ブリジット学園にもどされるともとの性格にもどる。そんなフランツをポールは回想して，レ・ピエール・ソナントへの過剰適応がフランツを呪縛している，と見ぬいている。フランツはあらゆる変化をおそれ，みずからの不動性という城塞にたてこもっているのだ。それを見ぬいたのはむろん，したしかったこともあり，また「ふたごの直観」（これも「愚者の知恵」の一種。II参照）によるところが大きいとポールはいうが，なによりもポールも変化をおそれ，フランツに共感したためだろう。しかし人為的な変化は排除できても，人間をとりまく大自然の力「気象」の変化だけは予測できない。気象の変化に病的なほど過敏なフランツにとってひとつの砦となるのが，シュラン家の魔女じみた老女中メリーヌである。メリーヌは無学文盲だが，中世からの伝統的な民間信仰や農民の知恵といったものにかけては右に出るものがない。そのメリーヌになつたフランツは，彼女がふともらす気象にかんすることわざや，民間暦の守護聖人がおりなす中世的・定住農耕民的な網の目を利用して，循環する均質な時間＝「カレンダー」のなかに気象の変化を予測可能なシステムとしてとじこめてしまうことにどうにか成功する。

「^{リキア}さまの日〔冬至の翌日〕には^{ドミ}のひと飛びぶん日が長くなる」「4月に雨降り5月に風吹きゃ五穀豊饒」「夕焼けの翌朝空が白めば巡礼びより」「2月はいちばん短くて天気もいちばん悪い」「クリスマスがあったかいとイースターは寒い」「小雨は大風をしずめる」「4月の雨，5月の露」「うろこ雲の空と厚化粧の女は長持ちしない」…フランツはちっちゃなころからこんなことをくりかえしメリーヌに聞かされ，不安をしずめてきた。でも相かわらず天気の変遷の犠牲者で，嵐の日なんか学園では

目がはなせないということだった。なにをしないでかすかわかったものじゃないんだ。
[62]

この民間の知恵によって、フランツは天候 (temps) を時間 (temps) のなかに固定してしまおうとこころみるのだ。しかし皮肉なことに、メリーヌはそのただひとつの砦を、つくったときとまったくおなじ無頓着さで破壊してしまう。1月にしてはあたたかなある晴れた日、メリーヌはその日にふさわしい平凡なきまり文句を口にして、知らずにフランツを絶望の淵にたたきおとしてしまう——「[...] メリーヌが口にしたあの文句は、きっと女の人がおもいついたんだ。それから女という女がみんな、あらゆる地方で語りついだんだとおもう¹⁰⁾。『もう季節なんてありゃしない』って」[62]。このことばを聞いたとたん、フランツはひきつけをおこして失神し、かつぎこまれて鎮静剤を打たれる。見えない因果関係にみちびかれたこの事件を機にかればメリーヌを避けるようになり、「ほかの能力すべてとひきかえに彼のクロノロジックな天才は増大した」[63]。彼はあらゆる停滞や急流を否定する均質な時間、というデカルト的時間概念で全世界をおおってしまうことに成功する。知能検査の結果で白痴に近いと判断されながら、頭のなかの巨大なカレンダーをあやつる「カレンダー少年」の名をほしいままに、彼は学者たちやマスコミの質問攻めにあうことになるのだ。「1591年8月28日って、何曜日?」「すいようび」「1993年2月の第4月曜は何日?」「22にち」[...]「1918年11月11日の曜日は?」「げつようび」「その日なにごおこったか、知ってる?」「知らない」「知りたい?」「べつに」「じゃ、4万2930年7月4日は?」「げつようび」「4月21日が日曜にあたるのはいつ?」「1946年、1957年、1963年、1968年…」[58] といった問答がつづく¹¹⁾。

即座に、間髪を入れず答えるので、いかなる暗算によるものでもなく、記憶の努力によるものでさえないのはあきらかだった。

「1732年2月22日生まれれのジョージ・ワシントン、2020年には何歳になる?」

フランツは躊躇せずに288歳と答え、なぞは解けずじまいだった。なにせ彼は引き算の最初歩ができないのである。[59]

しかしこのESP的な「愚者の知恵」をもってしても、気象の恐怖をはらうことはできなかった。室内にいても気象には敏感で、気圧が1025ミリバールを超えると躁状態、985ミリバールを割ると鬱状態となる。つまり時間 temps

にとらわれたカレンダー少年はまた、天候 temps にとらわれた晴雨計少年でもあったのだ。このふたつの temps のたわむれは小説をつうじてすがたをあらわす（第6章では「時計と晴雨計」として）。このようにフランツは不動性によってあまりにも強く呪縛されていたので、その異能がけっきょく彼じしんを滅ぼしてしまう。やはり変化をおそれて外部を遮断しようとするポール（Ⅱを参照）にとって、これはひとつの警告となったかもしれない。

フランツについてポールがいった「過剰適応」の語をおもいだしてみよう。この語はたとえば、オーストラリアにイギリス人がもちこんだ犬が野生化したさい、えさになる小動物がそれまで天敵をもたなかったせいで無抵抗であるため、犬の食糧事情がよすぎて繁殖しすぎてしまった、といった場合につかわれる。過剰適応が生むものは通常は生態系バランスの崩壊と、最終的な食糧不足による種の絶滅である。トゥルニエはこの用語で、アイデンティティの危機という定住者の悲劇をあらわしている。あるいはまた、この語を人間にたいしてもちいることで、地球の定住者である人類の過剰適応をもほのめかそうとしているのではないだろうか。というのも、均質時間という枠組みは、大航海時代から植民地帝国主義時代にかけて西欧文明による世界制覇を可能にしたもので、その枠組みへの病的な偏執によってみずからを追いこんでゆくフランツのすがたは、有限の自然を科学力で征服した人類が20世紀末に直面する危機的な現実すら意識させるからである。この問題は、『フライデイあるいは太平洋の冥界』や『ガスパール、メルキオール、バルタザール』にあらわれる「核戦争後」のイメージ¹²⁾とともに、今後のトゥルニエ研究の焦点のひとつとなるだろう。

さて、フランツはジャンとポールの父が経営する織物工場に出入りするうち、旧式のジャカード織機が精緻な紋様を織りあげてゆく音が規則的であることにやすらぎを見いだす。フランツはひねもす工場にிரிびたり、その音楽につつまれているあいだだけは平穏でいられる。ポールは7日からなる1週間、28-30日からなる1か月、12か月からなる1年というカレンダーと、4-6本の糸を単位とするサージとの、周期性をもつ絶対の秩序という共通点を発見し、織機はフランツの脳だとする——「そう、ジャカード織機が話をして、フランツはそのことばがわかったんだ」[65]。外部を遮断しているふたごのジャン=ポールとも意志を伝達することができたフランツは、「どんなに長くてもいっていても、はてしなく同じことをくりかえす」[65] 織機のことばをも理解した。フランツは通常のコミュニケーションをみずから断ちきった。のこ

された最後のコミュニケーションは、有限で一方通行のものでしかなかったのだ。では、伝達言語の病としての精神障害は学園ではどのような意味をになっているのだろうか。子どもたちをとりまく言語状況をみていくことにしよう。

3. 原言語という異能

学園の4つのセクションのうち、いちばん外側のグループには「癲癇病みの子ども、聾啞の子ども、衝動に駆られやすい子ども、精神病の子ども」といった「見かけのうえでは正常な——性格上の欠陥や生まれつきの弱点があらわれていないときにかぎり——子ども、教育可能な子ども」[48]が属している。第2の円に集められている子どもたちになると「もはや外界にたいして開いた扉をもたなかった。やむをえなければ話すことくらいはしたが、読むことも書くこともけっしてなかったのである」[48]。第3の円の重度障害児たちは「はっきりしない音を口から出すだけで、その意味ときたら、すき/きらい、ほしい/いらぬ、たのしい/つまらない、というようなふたつの極に帰するばかりだった」[49]。そして第4の円の子どもたちは畸形である¹³⁾。言語運用能力によって区分された、はじめの3つの円をまずはじめにとりあげたい。

この構造がほのめかすのは、一見あまりに自明であるためことさらに意識にのぼらなくなっている以下のことである。われわれの社会では、コミュニケーション能力の欠陥は精神障害のあかしとなるということ、ならびに、その能力が「正常」からどれくらい離れているかが障害の大きさの基準であるということ。たしかに人間の本性が「ことばをもつこと」¹⁴⁾そして「社会を構成すること」にあるとする古典期ギリシア以来の「人間」の概念からすれば、愚昧・狂気のあらわれがまず言語の領域にみとめられるのは自然なことである。

さて、神話を重視するトゥルニエの作家的関心は、創世神話が語る「世界のはじまり」にむけられている¹⁵⁾。「起源」に「ことば」がしばしばむすびつけられること¹⁶⁾についても、彼は無意識ではいられない。この主題はトゥルニエ作品の各所にみられ、『ガスパール』のなかで開花している。それは「人を養うことば […] 人を教える食物、 […] 食べられ飲まれる真実 […] かんがえや教訓や証しとなる果実」¹⁷⁾としての、エデンの園の失われたくだものである。『ガスパール』にさきだつ『気象』にこそ、その発想の萌芽を指摘できるのではないだろうか。トゥルニエの諸作品のどれにもまして、『気象』では言語の問題がくりかえしとりあげられるのである¹⁸⁾。そこでは登場人物のおおくが言語の起源にとり憑かれている。放縦な「塵芥のダンディ」をもって任じるア

レクサンドル叔父ですら、同性愛の関係にある少年ダニエルの枕もとで、寝息にまじるバブリングに耳をかたむけ、言語の起源＝起源の言語を夢みるのだ。

規則ただしい寝息や、ため息、体の動きなど、眠りの小さな工場と化したダニエルの活動のすべてにおれは耳をかたむける。くちびるからときどき漏れる、はっきりしないことばは、秘密でありながら同時に普遍的でもある言語、文明以前の全人類が話していた化石言語のようなものじゃないかと思った。発狂にも似た、ねむる人の生。夢遊病はその発狂がおもてに出ただけのものだ。[257]

「発狂 (démence) にも似た、ねむる人の生」のことば、それはトランスや宗教的忘我状態 (エクスタシー) などの意識変容状態において発せられる異言に近いといわれているだけではないだろう。そこには、有用性という西欧近代の尺度からみて排除されている狂人たちの、異能としてのことばもあるだろう。だからこそ、彼らが発することば以前のつぶやきは世界への呪詛となり (I-2 に引用した第3章 49 頁を参照)、秩序内部の住人に不安をあたえるのだ。

ここでこの事実を読者に意識させたトゥルニエが、ラルエ医師をものがたりを導入するのは、言語と人間意識の起源についての象徴的な真実を暴露するためではないだろうか。第3の円に属する重度の障害児たちにたいして学園でとられている方法は、お絵かき、粘土あそび、切り紙、自転車といったものである。あらたに第3グループの担当となった小児精神科の若いインターンであるラルエは、言語学と音韻論に興味をいだいている。彼は着任そうそう、中庭に自転車のための交通標識を導入し、交通違反をおかした子どもはしばらく自転車に乗れないという罰則を規定する。数か月後のある日、おどろくべきことに、子どもたちの違反は激減するのだ——「まるで子どもたちみんなが、じぶんたちにむかってしめされた12個ばかりの標識を、同時に理解し、自家薬籠中のものとしてしまったかのように」[50-51]。ひとりひとりの能力はばらばらなので、全員が同時に独自に理解点にたっしたはずはない、とラルエはかんがえる。とすれば、そこには子どもどうしの、なんらかのコミュニケーションがあったはずなのだ。彼らの口が発する音を録音し、音韻論の見地から分析をこころみた結果、彼はひとつの、すぐれてモノガタリ的ともいえる仮説に到達する。

[...] 彼は、どの子も同数の基本音素を持っていること、そしてこの音素一式のなかにフランス語の基礎となる発音素材のみならず、ほかの言語の発音素材——英語の th、スペイン語のロタ、アラビア語の喉音 r、ドイツ語の ch などともふくまれている

ことを確認したとおもった。どの子もおなじ音素を持っている。これは模倣では説明がつかない。人間精神に新地平を開こうとするかのように、はるかに異様な仮説が、ラルエの研究からじょじょにひきだされてきた。それはつぎのようなものである。人間ははじめはみな、全言語の発音素材をすべて持っている。全言語とは、現存の言語やかつて存在した言語すべて、いやそればかりか存在が「可能」なかぎりの言語すべてだ。しかし母国語習得のさい、不要な音素を使用するすべは永久にうしなったりになってしまう。のちのち外国語をなにか学習することになれば、それらの音素が必要とされるばあいもあるが、そのときにはかつて保っていた原型のままではとりもどせず、母国語に属する使用可能な、適当とはいいがたい要素で人工的に、不完全なかたちで再構築することを余儀なくされるのだ。これで外国人のなまりが説明できよう。[51]

ふるくから夢想されつづけてきた「原言語」のすがたが、ラルエ医師の博物学的ともいうべき仮説のなかで形成されてゆく。

言語はこの根が残っていると畸形になってしまう。それにしてもこの根はどんな性質で、どんな機能なのか。もはや一国の国語がどうこうという段ではない、とラルエはかんがえた。全言語の子宮、アルカイックな普遍的基盤言語、マダガスカルのシーラカンスやタスマニアのカモノハシが特異な環境のもと生きたまま保存されてきたように、精神異常のもとに残った、ことばの生きた化石なのだ。[52]

こうして障害児たちに、個体発生における言語の種子を奇蹟的にたもつ異能のもちぬしというあらたな相貌があたえられる。つまりバブリングを一種の「言語のネオテニー」¹⁹⁾ としてとらえかえすわけである。ラルエは、ロックが『人間悟性論』で展開した「タブラ・ラサとしての心」という経験論的な立場ではなく、プラトンのアイデアや、デカルトが『哲学原理』で「自然の光」とよんだボン・サンスなどの「生得観念」の側にくみすることになるようだ²⁰⁾。しかしここでもっと注意すべきなのは、子どもたちが発することばを *monstruosité* と形容していることである。障害児たちが発する異言は、ことばの畸形として博物学的なまなざしにさらされ、シーラカンスやカモノハシにも比すべき造化の奇蹟として好奇と畏怖がまじった驚異（こわいもの見たさ）の対象となるのだ。医師のまなざしによって、病理学的というよりもむしろ博物学的というにふさわしい枠組みが戦略的に構築されていることをここに指摘しておきたい。

女性職員シスター・ベアトリスは、ラルエの研究を注意ぶかくみまもっている。20年来障害児を世話してきた彼女の、小説における位置は、愚直な宗教的使命感に満ちたその持論にあきらかである——「才ある人や賢者にさえも隠

しておかれた真実を、主がこの愚かなるものたちには明かしてくださった。このことを知らずにどうしてこの子たちをしかるべく尊重し、愛することができようか。そもそも主のみこころにくらべれば、わたしたちのまずしい知性とダウン症患者 (mongolien)²¹⁾ の意識とにはっきりしたちがいなどがあるというのだろうか」[46]。異端の烙印を押されないよう口には出さないが、彼女は精神薄弱児たちの「舌の麻痺」[47] をときはなつ精霊降臨 (ペンテコステ) の実現を夢みる。そしてラルエ医師の研究成果からさらに奇抜な仮説をたててしまうのだ。

[...] それは [...] 「原言語」、エデンの園でアダム、エヴァ、蛇そしてヤハウェがかわしていたことばなのだ。[...] 彼ら [アダムとエヴァの子ら] の地上的な耳に、両親がふたりでしゃべりつづけた楽園のことばが、はっきりしないざわめきのように聞こえなかったという保証はない。移住先の国語を移民がいつまでたっても身につけられず、親たちのなまりやことばづかひのまちがいに2世がはずかしいおおいをするようなものだ。同様に、重度障害児のやりとりがわたしたちに理解できないのも、楽園喪失にはじまりバベルの塔の大混乱でしめくられた退化によって、わたしたちの耳がこの聖なる特有語法にたいして閉ざされているからだ。このバベル的状况こそ、無数の言語によって分断され、だれひとりそのすべてを制覇したものがないという、人類の現状そのものではないか。[52-53]

この文字どおりの「原言語」と、さきに引用した、第9章257頁でアレクサンドル叔父がダニエルの寢息に聞きとる文明以前の化石言語とが、同じ「神話」を語っていることが容易に指摘されよう。同時に注意しておきたいのは、ラルエが個体発生の観点からみた言語起源論を代表したのにたいし、ベアトリスは系統発生の観点からみたそれを体現している点であろう。ここには、エデンの園から逐われたために人類の言語が原初のゆたかさをうしなったとする、完全に「起源神話」のかたちをそなえた言説と、人間の救済が可能ならばそれはどこにあるか、という実存的な問いとがある。この点から彼女を、『ガスパール』において楽園喪失＝言語の空虚化の神話(註17)を語るディオスコリデス島のラビ、リザ師のプロトタイプとみなせるのではないだろうか。

トゥルニエの小説世界をこのように見てくると、すべての人間が始原の時間への妄執にとりつかれているという構造があらわれてくる。エデンの園の主題は『気象』後半部では、ジャンと彼を追うポールのまえに、さまざまな庭のすがたをとってあらわれてくる。たとえばチュニジアのジェルバ島にイギリス女性デボラが構築したエキゾチックな庭は、ほんらい水がないところに水をおく

りつづけること、つまり自然を科学で征服することによってのみ存続できる反自然の人工楽園である（第16章）。フヴェラゲルジにあるアイスランド最大の温室は、北極圏の厳寒にもかかわらず、おなじくきびしい火山の火によって奇蹟的に外来植物を繁茂させている（第17章）。そして奈良では、ユングの「老賢者」じみた「上人」という人物が、「見立て」によって宇宙を凝縮する茶の庭、形而上学的な箱庭、植物を人為的に畸形化する盆栽を紹介する（第18章）。これらの庭は、『フライデイ』のスペランサ島とおなじく、始原の無時間性への指向性を人間が帯びていることをあらわしているのだとみてよいだろう²²⁾。

ところで、シスター・ベアトリスが前述の仮説をたてた動機は作中に明記されている——「じぶんの障害児たちの痴呆性を、絶対のものとしてはみとめたくなかったのだ」[52]。これを見るかぎりシスター・ベアトリスの出発点は、しいて名づけるならキリスト教的ヒューマニズムとでもいうしかない漠然としたものである。もっとも彼女の信仰はあまりに愚直であるため、上層部の意向に反して民間信仰や神秘主義、異端へのぬけ穴がぼっかりとあいている。それゆえにこそ「聖性の本源とでもいうものを賦与された——同時にとても残酷な呪いがかかっている——この子たちのまえで、彼女は魅せられていたようなものだ」[47] というように精神薄弱児たちのうちにある聖なるものにたいして敏感だったといえよう²³⁾。ではシスター・ベアトリスに代表されるキリスト教的ヒューマニズムは、はたしてどこまでも柔軟でいられるのだろうか。

4. 畸形児たち

本館の屋根裏にある第4の円にのぼるとき、シスター・ベアトリスのひたむきな信仰にも絶望の影がかかってしまう。ここにはまるで物体のように無反応で、立つことすらできない「名前がないものたち、錯乱した自然がうみだした最悪の畸形」[53] である最重度の障害児たちがいるのだ。ずっと以前から第4の円ではたらくネパール出身のシスター・ゴータマだけが、このつとめに倦んでいないただひとりである。「超人的な沈黙能力」[54] を身につけて、完全な隠遁者として奉仕をつづける彼女に、ベアトリスは比類ない聖性をみとめている。そしてあるとき、人間創造にかんするシスター・ゴータマのヴィジョンの、ラルエの仮説とのあまりの類似に、彼女はおどろかされるのだ。

じぶんのすがたに似せて、つまり男であって同時に女であるヘルマプロディトスとし

て、人間をおつくりになったとき、その人間が孤独で不しあわせなのをごらんになって、伴侶を見つけてやろうと、動物という動物をみな人間のまえに並べたのではなかったか？ 理解しがたい奇妙なやりかただ！ つまり万物の夜明けには無限の自由があったのだろう。この、動物界全体の膨大な数量の検討が失敗に帰してはじめて神は、アダムに必要な伴侶をアダム自身から抽きだす決心をなされた。それでヘルマプロディトスから女性的部分をすべてとりだされ、それをもって自律した存在に仕立てあげたのだ。かくしてエヴァが誕生する。[56]

ここにはヘルマプロディトスというギリシア的なエロスの表象と、アダムというヘブライ起源の始原人の、シンクレティックな統合がある。両性具有のアダムは『大雷鳥』所収の短篇「アダム一家」にもみることができる。カバラでアダムをデミウルゴスと同一視するばあいがある²⁴⁾ように、アダムが男女・善悪などの対概念以前の「全にして一」とみなされるのもあながち不自然なことではない。両性具有の表象がトゥルニエ作品のなかにみられるとき、そこにはかならず原初の一体性への渴仰がみられる²⁵⁾。シスター・ゴータマのなかにもまた、始原へとひきよせられていく指向性があるのだ——「ひとりで畸形児たちとむかいあうとき、天地創造時のこの暗中模索²⁶⁾について、ゴータマはかたときも忘れたことはない。彼女の単眼畸形児、水頭症児、耳頭体児は、べつように思い描かれた世界に真の居場所が得られるはずではなかったか？」[56]。

しかしシスター・ゴータマの思索の深さにおどろきながらも、シスター・ベアトリスはじぶんの信仰にあらたな局面をひらこうとはしなかった。彼女はシスター・ベアトリスの洞察を知ったことだけに満足して、そこからふたたび素朴なじぶんの信仰へと逆もどりしてしまう——「シスター・ベアトリスは、ふたつの思索がこのように収斂してじぶんの施設を人類根源博物館へと変えようとする、そのとばくちのところで歩みを止めてしまった。彼女にとってすべては、底知れぬ神秘の夜、かならずおとずれる愛の昂まりへと、溶けてゆくのだ」[56-57]。ここにいたるまでわれわれはシスター・ベアトリスの信仰にたいして「愚直」「素朴」と形容してきたが、上の引用に見られるように彼女の信仰が神秘主義にたいして開かれていることをくりかえし指摘しておきたい。狂信的な女性神秘主義者の伝統をもつカトリックの歴史をかながみて、上の引用の最後の一文がシスター・ベアトリスの抑圧された性衝動の存在といったものすら主張しないとはいえないのである²⁷⁾。シスター・ベアトリスの存在を、キリスト教の可能性（その思想はどこまで行くことができるか）を肯定的にえがきつつも、同時にその限界（その思想はどこまでしか行けないか）をもしめ

すための人物として作者が配したのだと読むことはできないだろうか²⁸⁾。とすれば、フランツのエピソードとならんで、西欧近代への疑義としての人物配置をここにみることも可能である。キリスト教の問題は、小説では、アレクサンドル叔父のタボル学園時代の親友でのちに神父となる同性愛者トマ・クーセクにひきつがれることになる。この問題をとりあげることは本稿の流れから逸脱することになるのでここにとどめておくが、第5章のおわりで精霊を論じ、キリスト者でありつづけることを宣言するクーセクに、そのキリスト教の困難を認識しつつその可能性を問う作者の姿勢があらわれていることを指摘しておく。

ところで、トゥルニエが超現実＝象徴的現実を「現実」に導入する戦略として、博物学の視線を描写にもちいたことは、I-3で指摘したところだが、シスター・ゴータマが育ててきた畸形児たちを楽園と直結させるときも、描写は博物誌 (*histoire naturelle*, 自然のモノガタリ) の様相を帯びざるをえない。

内臓脱出症——内臓がむきだしになっている——の子をひとり、脳ヘルニア——脳みそが頭蓋骨の外にはみだしている——の子はふたり、耳頭体——両耳がひとつに癒合してあごの下でつながっている——の子もひとり、育ててきた。なにより印象的だったのはしかし、神話の世界からさまよい出てきておそろしいリアリズムで神話をえがいてみせたような畸形児たちだった。たとえば鼻のうえに目をたったひとつだけ持っている単眼畸形児 [*cyclope*]。両脚が単一のかたまりになって、12本の指が先端で扇のようにひらいている人魚体 [*enfant-sirène*]。[55]

これをみてもあきらかなように、トゥルニエの小説を支配するまなざしが博物学に負うものとして、自然の驚異(人間、動植物、鉱物、風景)をまえにしたときの「逸脱」の重視と羅列への指向、そしてなにより「存在の大いなる連鎖」として宇宙を把握することへの情熱、といった要素があげられるだろう。こういった諸要素こそが超現実をよびこむためにトゥルニエがとった方法ではないだろうか²⁹⁾。この思想史の問題がトゥルニエ研究に占める位置については今後の課題とする。ひきつづいて次節では、じぶん(たち)の異形性をポールが痛切に知らされた「緑日の巡礼」という通過儀礼の周辺に頻出する幻想文学的モチーフのかずかずを中心に俯瞰することをこころみたい。

II 神話的雙生児の異形と異能

1. さらされる怪物

ジャンとポールはあまりにも似ているので、母マリア＝バルバラ以外のだれにも区別できない。微細なちがいを消し去ってしまう睡眠に彼らが支配されているあいだは、母でさえふたりを区別できなくなる。類似は身体的なものにとどまらない。のちにジャンは変化をもとめて外部へ出てゆこうとし、ポールは変化をきらってジャンとともに雙生児の殻にとじこもうとする、という性格（むしろ運動）の差が出てはくるものの、雙生児としての宿命はきわめて強く、むしろふたりが雙生状態の支配下にあるといったほうがよいだろう。たとえばこういうことである。ふたりは子ども時代からおなじ服を着て育ったが、雙生状態からの脱出の何度目かのこころみとして、ある年ジャンがポールとべつべつに服を買うことを提案する。そこでジャンは母とある店へ、ポールは父とべつべつの店へゆく。帰宅後にジャンが買いものをポールと父に見せると、ふたりは大声で笑いだす。ふたりはほとんどまったくおなじスーツ、半そでシャツ、セーターを買ってしまったのだ。このようにふたりは運命的に雙生児なのであり、それをのがれることは困難である。彼らは、母や織物工場に代表されるレ・ピエール・ソナントのうごかない世界にまもられ、その逸脱性からいきおい聖ブリジット学園の障害児たちとのあいだに深くしずかな友情をたもっている。けれども彼らは、無理解な外部の好奇のまなざしにさらされる運命にあるのだ。彼らは神話的雙生児という名の「怪物 (monstre)³⁰⁾」なのだから。

ジャンとポールがひどく似ているので、客があるたびに父はしばしばおもしろがってふたりを披露する。ふたりのあいだでひそかに「サーカス」とよばれているこの悪趣味な見世ものに来客は喝采し、ふたりを「見くらべてみたり、いれかえてみたり、とりちがえたりしていつまでも遊んでいたものだ」[142]。こういったことのひとつひとつにふたりはふかく傷つく。あるいはそれ以上に軽薄な、宣伝映画へのふたりの出演をこにくわえることもできるだろう。休暇にきていた広告映画会社の社員ネッド・スチュワードにスカウトされて、映画館で本篇の上映まえにかけられる短いコマーシャル映画に、ふたりはむりやり出演させられることになってしまう。この場合も、ふたりの出演を最終的に承諾したのは父である。この小説ではエドゥアールはつねに俗世間の覇者であり、もちまえの要領のよさと闊達ゆえにかえって、象徴的な真実の側に立つ息子たちをしばしばいらだたせ、傷つける。さてその映画は「ジュモー

(JUMO)」という商標名でよばれる双眼鏡の宣伝用フィルムである。商品名が *jumeau* (x) (双生児) の音をもつのはもちろん偶然ではない。なぜならば *jumeau* の女性複数形 *jumelles* には、「ふたごの姉妹」のほかに「双眼鏡」の意味があるからである。したがってジュモー双眼鏡 (*les jumelles JUMO*) という名には、なにかだじゃれじみた幼児的な言語フェティシズムがつきまとわざるをえないだろう。こういった事情で、スチュワードがそれを意識していようといまいと、結果としてジャンとポールはここでこっけいなさらしものにならざるをえないのだ。

さて、この「怪物」の語について、ポールはこう語っている。

Monstre の語はラテン語 *monstrare* [= *montrer*] に由来する。怪物とは見せるもの、サーカスとか縁日なんかでさらしものにするもので、ぼくたちもこの宿命からいられるわけにはいかなかった。[143]

この一節はあきらかに、『気象』にさきだつ長篇『オーヌの王』の冒頭、1938年1月8日の項に寸分たがわず一致する。

だいたい怪物とはなんだ？ そもそも語源からして驚きで、いささかぞっとする。なにせ *monstre* は *montrer* からきてるといふのだから。怪物とは見せるもの——指さして、縁日だのなんだの。だから異形であればあるほど、それだけよけいにさらしものにならなきゃいけない。³¹⁾

これはラテン語の語源説ではむしろ逆であり、*monstrare* のほうが *monstrum* (= *monstre*) の語源になったという説のほうが一般的である。中性名詞 *monstrum* にはすでに「怪物」「奇異」「先天畸形」の意があるが、本来は「いましめ」「予兆」の意味である。なぜならばこの語が *monumentum* (= *monument*) と同様に、他動詞 *moneo* 「(あることについて) おもいさせる」「警告(予告)する」からの派生語だからにほかならない³²⁾。またギリシア語にも類似の例があり、*tératologie* (畸形学) の語源 *τερας* も *monstrum* とおなじように「予兆」と「怪物」の意を兼ねている。となると怪物とさらされることとの関係はよりふかい必然でむすばれているようにおもわれてくる。ここで警告する主体となるのは神であり、それゆえ古来不具者たちは神意(おおくは神の怒り)の表象となったし、現代においては環境汚染による畸形児の誕生がその神話のあらたな変形となっているわけである。それよりここで指摘し

ておきたい特異な点は、上記のふたつの怪物論が、いずれも怪物じしんによって——前者は人喰い鬼アベル・ティフォージュ、後者は神話的双生児のかたわれポール——それもじぶんが怪物であることを運命として意識している怪物によって語られることである。

ふたつの怪物論の符合をいやがうえにも強調しているのが、『気象』におけるジャン＝ポールとティフォージュの邂逅である。ふたごが8歳くらいのときにそれはおこった。ふたりは父につれられてパリで数日をすごしたあと、プルトーニュにかえるときに自家用車が故障する。そこでポルト＝デ＝テルヌ広場の自動車修理工場に車をあずけることになるが、『オーヌの王』の読者にはあきらかなように、ポルト＝デ＝テルヌ広場の修理工場こそティフォージュの所有に帰するものなのである。その容貌を回想して、ポールは恐怖をあらたにする。

この修理店の経営者³³⁾ほど醜悪な男は見たことがない。ばかでかい男だった。黒いストレートの髪で額がせまく見えた。黒ずんだ顔に文鎮みたいなぶあつめがねをかけていた。でも、とくに印象が強かったのは手だ。左官の手、絞殺強盗の手——しっくい白でも血の赤でもなく、汚油で黒いところがちがうだけだ。[…]

3人そろって修理店を出たとき、翌日の正午にならないと車がとりもどせないってわかっていながら、あんな悪夢のような姿のやつとはこれっきり縁切りにしたいとしんそこ祈らずにいられなかった。[161-162]

この出会いと、これにつづく見世もの小屋の体験、ふたたび自動車修理工場の男³⁴⁾が介入する「ローター」での体験が、ポールのいう「縁日の洗礼」を通過儀礼として構成している（Ⅱ-3を参照）。ここでは、嫌悪にかられたポールがその男のほうを見ることをひどくおそれたのにたいして、ジャンのほうは男の動作に奇妙なところを発見しては声をたてて笑い興じた、というふたりのちがいを指摘しておくにとどめる。さいごに、「さらされる怪物」のイメージがもっとも鮮烈な、見世もの小屋の描写をみていくことにしよう。

自動車をあずけたあと3人はレストランで食事をとる（エドゥアールは給仕長のまえでまたふたごのサーカスをやらかしてみせる）。ひとり子どもじみたはしゃぎぶりをみせる父の提案で、父子3人はヌヌーの縁日へと足をはこぶことになる。そこでいかかわしい衛生博覧会的な百鬼夜行が双生児を呪縛する。

[…] その小屋は […]「世ニモメズラシキ天然ノ驚異」といううたい文句だった。女

の子が水槽のなかでうろこのついた覆いに下半身をかくして、人魚でござい、とかのいいかげんなインチキとならんで、「リリパット人〔こびと〕」の夫婦だの、世界一の女だの、へび男だのといった生の不具者も何人か、陰気にせいぞろいしていた。でも炎のあかりが蛾をさそうようにジャン＝ポールをひきつけたもの、それはガラスのショウケースでさらしものになっていた。畸形学史上もっとも不可思議なシャム双生児たちの死体がミイラ化されて（というふれこみで。というのも、いまにしておもえば、蠟と革でできたマネキンだったんじゃないか）こわいコレクションとなっていたのだ。そこで、胸骨のところできっついた剣状突起結合体、お尻のところか癒合している臀部結合体、額がいっしょになった前頭結合体、首すじではりついて一体となっている頭結合体をじっくり見る事ができた。見ものの頂点といえば有名なタッチ兄弟³⁵⁾という、ひとつの胴体から頭がふたつ、脚が2本、腕が4本出ているイタリア人の二頭二頸畸形だった。

この展示がぼくたちにとってなにか忌まわしいものを持ってることくらい、エドゥアールがわからなかったなんてこと、ありうるだろうか？ ぼくたちはまるで蠅みたいショウケースにへばりついてた。それで父がぼくたちを引っぱがそうとせつつきみだったのは、ただの短気だけじゃなくて、恥ずかしかったんだと、ぼくにはおもえてしまう。[163-164]

「縁日の洗礼」の第2段階として、怪物たちのなかにシャム双生児がふくまれているという事実がここでジャンとポールに開示される。ポールによれば、この体験によってジャンは双生状態そのものを不具として意識するようになったのだという。とすれば、この場面は小説の後半を占めるふたりの分裂劇の出発点として読むことができるだろう。では、この神話的雙生児はいったいどんな怪物なのだろうか。ここでわれわれは「縁日の洗礼」の場をいったんはなれて、ジャンとポールが構成する閉じた世界へと目をむけなければならない。

2. 同一性が支配する「宇宙卵」

ポールによれば、ふたりでひとりの同一性に支配された彼ら双生児には「ふたごの直観」という超人的な洞察力がそなわっているという。それは、ものごとくに焦点をあてる力が、ちょうど一對のレンズをもつ双眼鏡のように二重であるためにそなわった、ひとびとの目には見えない象徴的な真実を透視する力だといえるだろう。じぶんたちが出演したコマーシャルフィルムについて述べながら、ポールは「ふたごの直観」について以下のように語っている。

前景、それはより広い風景、より深い視覚、シュールなほどの無類のきらめきを放つくだものや木や顔。逆むきのショット、こっちはふたごの兄弟、ここで双眼鏡はふた

りの象徴、紋章、同義語としての道具にすぎない。

この場面の意味はほかでもない、ひとなみ以上にものを視る力、つまり世界をもっとよく見てもっと深く掘りさげ、もっとしっかりと知り、じぶんのものにして洞察するための鍵があって、ぼくたちがその所有者だという意味なんだ。[148]

「ふたごの直感」はいくつかの場面にあらわれているが、これもまた「愚者の知恵」のモチーフに忠実である。トゥルニエの世界では、なんらかの異能は偶然的なただの逸脱や超越ではなく、つねに説話論的な還元がほどこされうるといふ好例である。と同時にポールは、ジャンとの決裂によってこの能力が失われてしまったと語っている。これは楽園に代表される無時間性を帯びたユートピアの喪失、すなわち原初の一体性の喪失に対応する。この喪失とそれを補償し超越する再建のテーマはトゥルニエの第1作から共通して作品の軸として機能しているが、『気象』においては『フライデイ』のばあいにくらべて形而上学的な解釈をほどこすことがより容易（つまり図式に忠実）であり、つぎの『ガスパール』ではさらに形而上学的な色彩が濃くなっているともいえるのではないだろうか。いずれにせよじぶんたちの特異性（とりわけ異能）を、ポールじしん «monstruosité» とカッコつきでのべているとおりに、この小説をつうじて神話的雙生児は、つねに異人の運命をせおったしとしてたちあらわれる。

もっとも肝要な異能のひとつとポールがみとめるのが、ふたりだけに通用する、「エオリアン」と家族によばれている秘密言語（cryptophasie）である³⁶⁾。耳にやさしい風のような音でふたりがひそひそとかわす「うちの」会話は、周囲の人間には理解することができない。この特殊な言語能力をポールは、通常の言語能力のなにかを犠牲にして獲得したもののみなしている³⁷⁾。彼らになんらかの言語障害があったとはされていないので、むしろ言語だけではなくコミュニケーション能力全般のことをさすのだとかがえられる。すなわち彼らの自閉性こそそれである。あるいは畸形や異種交配による雑種がしばしば虚弱で死亡率が高いように、小説の冒頭でふれられているとおりにふたりが虚弱かつ未熟で、ほかの兄弟（雙生児は末子であり、多産な母マリア＝バルバラはかれらのうえにおおくの兄や姉を産んだ）よりずっと長く母の庇護が必要だったこともふくまれよう。いずれにせよこの「愚者の知恵」の一変形である伝達機構の排他性は、ジャンやポールの語りのなかでは「雙生児（jumeaux）」と「単独者（singuliers, sans-pareils）」という対概念としてあ

らわれ、それは作品全体をつらぬいて流れる双生児渴仰の要点となっている。

エオリアンの語彙は一般概念や抽象概念を欠く。たとえば *bachon* という語は *bateau* (船), *bâton* (棒きれ), *bouchon* (コルク栓), *bois* (木材), *écume* (泡) といった浮かぶものすべてに適用されるにもかかわらず、「浮かぶもの」という総称の意味をもたない。あるいは *paiseilles* の語は *pomme* (りんご), *raisin* (ぶどう), *groseille* (すぐり), *poire* (なし) をふくむけれども、一般の(単独者たちの)フランス語の名詞 *fruit* に絶対に一致することがなく、また同様に *poisson* (魚), *crevette* (小えび), *mouette* (かもめ), *huître* (牡蠣) をひとしく指示するべく存在する *cravouette* も「海の動物一般」へと抽象化されず、つねに個々のものもしくはその全体としてのどこもなく幼児的な具体性をおびて用いられるのである。ここで考察しておきたいのは、言語における抽象性はけっして言語以前にあたえられた「事実」なるものに相即するものではないというソシュール以降の一般言語学上の認識である。言語の抽象性は、既知の具体性のランダムさから人間の意識を解放するものであり、それによってこそ人間は未知のものへと語の外延(ひいてはみずからの思惟)を拡張していくことができる。だが、同時にそのカテゴリー化能力はつねにこのイデオロギーとしての言語に支配され、けっして無色透明な事実判定とはなりえない。だから一般言語に対置して抽象性を欠いたエオリアンが登場することを、たとえば *Herrenvolk* (君主的民族) というナチ用語のようなイデオロギー的概念が芽ばえる可能性が、通常言語にはたえず宿命としてつきまとっていることへの示唆として読むことも可能ではないだろうか。世界を支配したヨーロッパの言語の、この危険な抽象化への対比だろうか、トゥルニエはポールにこうも語らせている。

抽象概念の普遍性もなければ具体物をしめす豊富な語彙もないエオリアンは、言語の萌芽にすぎない。とても原始的な人びとが話すような、心理現象を大ざっぱにあらわすことしかできないことばなんだ。[157]

ここでわれわれは、前節で検討した原言語への夢想が、この場面でも登場人物を支配していることに気づかざるをえない。心身障害児たちとの、同類意識をともなったジャンとポールのしたしきは、この点から説明できるだろう。

しかしエオリアンにおいては「枝葉末節は単語であり、沈黙こそその本質である」[156, 原文イタリック]。ここでポールは、会話の表出された部分(発

話)とかくされた部分(文脈)の関係へとたちいった考察をする。ポールの考察の前提となるのは、かんたんにまとめると「対話者どうしのあいだの暗黙の了解(共通理解)の多寡によって、水面上に表出すべき発話部分の大小が反比例的に決定する」という、コミュニケーション論の根底にある法則である。「単独者」どうしの対話にくらべ「双生児」の対話は共通理解がきわめて大きいため、水面上に表出する部分はあまりに小さく、第三者は会話の内容を理解できない。エオリアンの中では共通の基盤(=沈黙)こそが伝達の本質をなしており、前述の奇妙な語彙は、補助的にそえられているにすぎない——「それは第三者は参加できない、発話ではなく沈黙による対話だから、絶対的な対話だ。「重い」ことばで交わされ、語り手のふたごの兄弟というたったひとりの話しあいてにしかむけられない、絶対的な対話」[158-159]。ここに原言語にたいする渴仰の影をみつけようとするれば、それは容易である。前節で引用したように、楽園を追放されたアダムとエヴァが、子どもたちという第三者には理解できない楽園の言語で話しつづけたのではないかとシスター・ベアトリスは夢想している。アダムとエヴァは、ほんらい一体のヘルマプロディトスだったところをふたつに分離して性差ができた、ふたつでひとつの神話的双生児なのである。そしてまたエオリアンの親密な重さはただちに『ガスパール』で語られる「果実=言語」へとつながってゆくことがここで確認される。しかしその重い自閉性は風神アイオロス³⁸⁾に由来するエオリアン(邦訳では「風の言葉」)の名にふさわしくない。沈黙のひとつひとつが双生児の真実の内奥に根づいているこの情報交換システムについて、ポールもそれがじつは「鉛のことば」にはかならないことをみとめ、ジャンはこの重さにたえられなかったのだろうと述べる。エオリアンの名は、周囲の家族がたんにふたりのひそひそ声から風を連想してつけた名称にすぎない。じじつ、軽快な風の言語とでもいふべきものをポールが獲得するのは、小説の最後で気象との交感が可能になったときなのだ。このように、『気象』は題名どおり風のモチーフによって執拗に飾られている。海上に発生した風がレ・ピエール・ソナントへとおとずれるさまを描写した長い一文を冒頭にいただくこの小説では、エドゥアールとアレクサンドル兄弟の長兄ギュスターヴは嵐の日に事故死し、トマ・クーセク神父は風としての精霊を論じ³⁹⁾、ポールはヴェネツィアで気象観測所の所員ジュゼッペ・コロombo⁴⁰⁾にみちびかれてじぶんの運命と気象との不可視の関係を感ずるのだ。ちなみにトゥルニエは、エッセイ『精霊の風』の「気象」と題された章で、もともとはこの小説の題を『精霊の風』とする構想だったと書いている⁴¹⁾。

エオリアンの発動状態の多くが重く具体的な意味を含んだ沈黙の交換にあることをわれわれはみてきた。それは、ふたつの体をもちながらまるでひとつの人格を共有しているかのような彼らの共通理解が、ほとんど同一の基盤のうえに立っているからだということだった。だからこそ沈黙が主導権をにぎり、抽象性をいちじるしく欠いた語彙が両者の微細な差異をうめているわけである。したがって沈黙の交換は、まったく同一のものの交換、有限・既知のデータの再確認であり、外部の単独者たちがかれらにもたらすなにか新しいもの、未知のものは、ふたりでいるときにはたんねんに遮断されているとあってよい。つまりここで双生状態は1個の完全な閉鎖系のモデルとなってくる。エオリアンをはじめとする、周囲の単独者たちには理解できない「交換」と「二重性」に裏うちされたふたりだけの遊戯、これをふたりは「ベップのあそび (jeu de Bep)」と呼ぶ。これは単独者たちとの接触で外気にさらされた身体からケガレを祓い、安定した双生状態をとりもどすためにおこなう清めの儀式なのである。この性的にして宗教的な、遊戯でありまた儀礼である同一性の確認作業は、ふたりが双生児という異能の怪物であることのいわば基盤なのであり、ただ気まぐれにとりおこなわれるものではない。ふたりが交換する「おなじもの」はだから、上に挙げた沈黙の言語だけにとどまらない。たとえば小説の冒頭で最初に読者の注意を喚起する挿話であるりんごの交換。午睡からさめた7歳のジャン＝ポールが空腹をうったえると、母はりんごの実をひとつナイフで割って半分ずつあたえる。するとそこでたちまち交換がとりおこなわれる。

それぞれじぶんのぶんを子細に調べ、なにもいわずにとりかえる。この小さな儀式の意味を母は理解しようとはおもわない。子どものただの気まぐれでないことだけはわかっていて、口いっぱいりんごをほおばり、家族が「エオリアン」と呼んでいるこの秘密のことで、ふたごはながながとふしぎなひそひそばなしをはじめ。[10-11]

きわめて高い儀式性をともなう、同一物の交換は、ここではむかいあっておこなわれる。しかし完全に閉じた彼らのシステムがより容易にとらえられるのは、この交換が彼らの肉体による円環構造をとってあらわれるときであろう。

昼間の単独者たちとの接触でゆらいだじぶんたちの位置関係をほんらいの双生児の閉じた関係に修正するために——というよりもむしろ、はなれていることから生じた両者のあいだの差異をあとかたなく消しさるために、夜になるとふたごは裸体でさかさまにからみあい、いだきあう。そこでおこなわれるのは

精液の交換である——「ふたごどうして合体するとき、さかさまに向きあって卵形をつくるけど、これはつまり二重胎児の合体だ。この姿勢は、時間や人生の弁証法には巻きこまれないぞというぼくたちの決意表明なんだ」[335]。この結合が形成するもの、それが絶対的原初の宇宙卵であるということは、ふたりの関係が彼らじしんによって「卵形の愛」とも「ふたごのフラスコ」ともよばれていることからあきらかであろう。各国の創世神話において語られる、天地創造以前の宇宙卵を模したふたごのすがたはそのまま、ファウストが人工生命をつかって神の世界創造のまねび⁴²⁾としたフラスコにもつうじる。精液はそのなかに遺伝子を含んだ、いわば液体となった情報であり、ほんらいならば生殖（同じすがたをしたコピーをつくる作業）につかわれるものである。ところがこの場ではそのコピーがすでについて、同一の情報をもったDNAを相手にあたえ、相手からもそれをうけとる。ということは、単独者の生殖行為とはほどとおいにかかわらず、やはり性のいとなみ以外のなにものでもないこのむすばれば、むしろゾウリムシなどの繊毛虫類がおこなう「接合」⁴³⁾にはてしなく近い。さらに、ここでふたりのすがたを、みずからの尾をくわえた蛇（または龍）すなわちウロボロス⁴⁴⁾の形象と解釈してみると、無限に円環をなす時間をここにみることもできるのではないだろうか。この自己完結性、円環のイメージは作品のそこそこに発見される。たとえば、アレクサンドルは「ほんとうのマスターベーションの象徴はじぶんのしっぽをくわえた蛇だ」[77]と語る。また彼が冗談まじりに夢想する「象の鼻をもつゴミ収集車」⁴⁵⁾のイメージも、ナルシズムとウロボロスをつなぐもののひとつである。

シタのダンプが道路にあふれ、収集人たちに給仕してもらって、色とりどりの供物を食べさせてもらっている。[...] ゴミ収集車と象は似ている。象の鼻つきダンプをつくるべきだな。ゴミ箱を巻きとって尻にあける、なんてどうだ。でもその鼻だが、男根の形をしてなけりゃ。それならもうゴミ箱はいらない。男根は男根で尻につっこんでいくからな。自家男色。[118]

あるいは彼がロアンヌの市営公衆浴場をおとずれたときのちょっとした騒動をここに付けくわえることもできるだろう。シャワーの順番待ちの番号札には6ケタの数字が記されているが、最初の3ケタ（千以上）は朝のうちは変わらない大きな数字なので、係員は下3ケタを告げることになる。係員が969番を読みあげたとき、順番を待っていた男たち全員がシャワールームに殺到し、騒動になる。じつのところ、順番がきていたのは正確には「696969」番であり、札

の上3ヶタが共通して696ではじまっていたその朝の客たちが、いっせいにじぶんのチケットをひっくりかえしてしまったために、その朝の客全員が「-969」番になってしまったのである。たがいがたがいの逆であるために交換可能な6と9が、ジャンとポールの精液交換のウロボロスにオーヴァーラップしてくるのではないだろうか（双生児の対称性についてはII-3, 4を参照）。

ばあいによっては、彼らは、ベップのあそびに周囲のひとびとを巻きこむこともある。たとえばジャンが母と、ポールが父と、というふうにべつべつに出かけることになったばあい、ベップのあそびのきまりでは「ぼくたちを見わけようとする単独者たちのおもいあがり」[243, ちなみにこれはジャンのことは]の裏をかいてたがいがこっそりいれかわることになっている⁴⁶⁾。これは全人格的な交換、肉体全体の交換と解釈することができるだろう。

II-2では、ふたりが「双生児の直感」や「エオリアン」といった異能のもちぬしであること、ふたりが完全な同一性をたもっているがゆえになりたつ遊戯=儀式「ベップのあそび」こそ、その異能に基盤を提供していること、またベップのあそびが堅持するふたりの卵形の愛が、原初の全にして一なる宇宙卵への回帰であることを指摘した。この同一性は、しかしじょじょにやぶられ、たがいの相違が強調されてくるようになる。宇宙卵が天地、男女、明暗、善悪といった対概念に分裂したように、また楽園のヘルマプロディトスがアダムとエヴァに分裂したように、この卵形の愛もまた、ジャンの要素とポールの要素とに分離せざるをえないのである（この分割のイメージは小説では、上述のりんごをかわきりにアフリカ大陸のエル=カンタラとジェルバ島のエル=カンタラ、東西ベルリンなどいたるところに周到に配置されている）。ではジャンは、卵形の愛から離脱するどのような要素をそなえていたのだろうか。この問題は双生児の「同一性」の概念ではとらえきれない。そこで双生児について考慮すべきもうひとつの概念、すなわち「相補性」のそれがここで浮上してくるであろう。

3. 相補的な正反対

ヌーの見世もの小屋でシャム双生児の「ミイラ」を見たショックから立ちなおらないうちに、ポールはさらに大きな衝撃をうけることになる。「縁日の洗礼」の最後をかざるローターの体験こそそれであり、ここにふたたび修理工場の男（ティフォージュ）が介入してくるのである。小屋から出てきたジャンはひとごみのなか、数メートルさきに男を発見する。男は力くらベゲーム機で

怪物的な力を発揮すると、拍手喝采する見物人たちをおいてさっさとべつ背の高いテントへと移動する。「ローター (ROTOR)」⁴⁷⁾の看板がかかったそのテントには見物用の有料の入口と体験用の無料の入口とがあり、男は、そしてジャンも、有料の入り口のなかへとすがたを消す。ポールは狼狽するが、エドゥアールはポールをつれて平然と見物人用の入り口にはいる。ローターは巨大な円筒形をなしており、そのシリンダーが高速で回転すると、その底にいる、ジャンや修理工場の男など6人ほどの体験者たちは、想像を絶する遠心力でシリンダーの鉄の内壁にへばりついてしまう。その底部をみおろす高みに位置する見物人たちにまじって、父のそばで肝を冷やしながらポールがみていると、突如として床板がはずれ、円筒はまるで底が抜けた鍋のようになってしまうが、不可視の力によって物理的な磔刑に処せられたかのような体験者たちは、そのまま落ちもせず壁に押しつけられたまま回転をしいられる。おどろいたことに、やがて男は信じられないほどの努力で遠心力にさからって内壁を踏みしめて、円筒の中心軸に頭をむけて立ち、さらに満身の力をこめて慎重となりのジャンを内壁からはがしはじめる。そして顔面蒼白のジャンをいだいたまま、高速回転の抵抗によってひしゃげた異形の顔で、内壁に立ちつづけるのである。

この大男を主人公とする前作『オーヌの王』であきらかなように、ティフォージュは少年を肩にかかえさらってゆくことを夢想している一種の性倒錯者である⁴⁸⁾。『オーヌの王』においてティフォージュは、象徴的な次元では食人鬼であり、ゲーテのバラッドで有名になった、子どもをさらってゆくゲルマン神話の「榛の木之王」であり、さいごには鉛のように重い幼子イエスを背負って河をわたる異貌の大男レプロブス (聖クリストフォルス) へと変貌をとげる。ところで上に要約した『気象』ローターの場面の年代設定はとうぜん、ナチスのフランス侵攻 (第10-12章) よりもまえであり、ティフォージュには聖クリストフォルスとしてはおろか「ほんの木之王」としての召命もまだである。けれども、おそらく前作最終部への暗示だろうか、ティフォージュに聖クリストフォルスのおもかげを付帯させるための描写を (この場面が修理工場の男にたいするおそれと嫌悪で吐きそうになっているポールの目によって描写されるにもかかわらず) ほんのわずかながらもトゥルニエが用意していることを指摘しておきたい。そのひとつは、だきあげられるまえのジャンのすがたが以下のように描写される部分である——「きみは背中で壁に横たわっていた⁴⁹⁾。というか手足だけでなく体の表面全体で、いや体そのものではりつけに

なってる感じだ」[166]。ここでは「はりつけ」という語の用法が、レプロブスがキリストにつかえようと発心するきっかけとなる、魔王を退散させた十字架をイメージさせる。もうひとつは高圧となつてのしかかる遠心力にさからいながら内壁に立とうとつとめる男の描写——「[...] アトラスが地球に押しつぶされそうになって、それでもゆっくり立ちあがって地球を肩のうえに持ちあげたみたいに、きみたちみんなを踏みつぶす巨大な見えないかかとと戦って、足をふんばり、しかしすこしずつ身を起こし、いま彼は立っていた」[...] [166-167] である。モロッコとアルジェリアにまたがる山脈に名をのこし、普通名詞としては「地図書」の意にもなっているように、天空をせおう巨人でプロメテウスの兄弟でもあるアトラスは、伝統的にはもっぱら全世界（地球）をせおったすがたでえがかれる。叛乱のすえオリュンポス神族にやぶれて平定されたときのいましめのすがたである⁵⁰⁾。アトラスはオリュンポス神族以前の神とされるティタン神族出身で、それゆえギリシア固有の表象というよりもむしろ、聖クリストフォルス同様古代地中海世界の「大力」の象徴とみなされるべきであろう。ところでヤコボ・ダ・ヴァラツォの『黄金伝説』では、子どもを対岸にわたしおさせたレプロブスが「全世界をせおったにしてもおまえほど重くはなかつたろう」というと、子どもが「おまえは全世界だけではなく世界を創造したものをせおったのだ」と答えたことになっており、おそらく世界を背負う大力の巨漢という神話的基盤があって、アトラスも聖クリストフォルスもその基盤にひきつけられたのだらう⁵¹⁾。修理工場の男はアトラスをつうじて聖クリストフォルスに接近しているのだ。このように、この場面で彼は民話の主人公のような超人性、異形性を、ことさらにせおわされている。それはおそらく「魔」との邂逅をもってふたごにそれぞれの通過儀礼を体験させるための、戦略ではないだろうか。じじつ、候補者を象徴的な死へとおくる恐怖こそが多くの通過儀礼のかなめとなるのである。「魔」との邂逅は時と場を周到にえらんでおこなわれる。つまり昼でもなく夜でもない、ものの輪郭がさだかでない時刻である夕方/宵（民俗学でも言われるようにたそがれ＝誰ぞ彼、オホマगतキ＝大禍時/逢魔刻である）、周縁的な土地ポルト＝デ＝テルヌ/ヌヌー（城塞都市パリの西の出口）、周縁的な場所（あやしげな芸人や商売人が交通する「市」、そして見世もの小屋）。こうしてふたりのローター体験は通過儀礼の様相を帯びてくるのだ。たとえば死んだようにぐったりとしたジャンは十字架のキリストをおもわせる。

そしてきみは、あの男の腕のなかに延びていた。まっさおになって、目を閉じて、死んでいた。そう見えたのもむりはない。側板の表面に押しつぶされたかとおもうと、この見えない鳥もちから引っぱがされ、こんどは肉でできたガーゴイルの顔をした先史時代のけだものの腕に抱きすくめられてるんだから。[167]

死の試練にさらされるのはジャンだけではない。ポールはこのテントの無料の入り口を「古代ローマのサーカスで野獣を通す通路みたいだ」[165]と述べるのを手はじめに、つよい恐怖をもってシリンダーを「魔女の鍋」[同]、遠心力を「拷問」[166]とよび、きゃしゃなジャンのからだが遠心力と男の腕力とのせめぎあいにもまれてくだけてしまうのではと恐怖し、男のゆがんだ異貌にはもっと深いおそれを感じる。そしてジャンがぶじローターからもどってくると、安堵のあまり失神してしまう。このように彼らはひとたび「死ぬ」のである。

この体験がふたりの決裂のはじまりとなることはいうまでもないだろう。「アダム一家」の両性具有のアダムがみずからのうちなる定住民をエヴァとして「身分け」してもらったように、いってみれば、堅固な宇宙卵を構成するふたごのジャン＝ポールのうち、親＝遠心力の非定住民的気質をもっているのがジャンのほうであることがここであきらかになるのである。ジャンは彼のいう「なんだかわからないもの (je-ne-sais-quoi)」[150]に焦がれるのだ。定住民と遊牧民という二項対立がトゥルニエの小説世界をつうじて弁証法的に機能していることは言を俟たない⁵²⁾。もうひとつ指摘しておくなら、その「冒険」に「かなりとくだった」[168]ように見えるジャンが死からの帰還をやりとげてすみやかに生のあたらしい段階へとすすんだのにくらべ、さいごに気絶してしまったポールがなかばとりのこされているのだととれないこともないだろう。

Ⅱ-2 でみたように神話的双生児が全にして一なる宇宙卵ならば、その「全体」にはどうぜん対立するふたつの概念がないまぜにとじこめられているはずである。こうして変化を愛するジャンとそれをおそれるポールは、小説のなかでことごとにあい反するものの表象でありつづけることになる。ふたつの要素は対立し、ときに反発しあうが、つねにたがいにおぎないあってひとつの全体をかたちづくる。これが「同一性」とならぶ彼らの「相補性」である。第8章において、織物工場では分離を象徴する毛すきの工程（そして毛すきの女工ドニーズ・マラカント）にジャンは惹かれ、統合を象徴する整経の工程（そして

整経の女工イザベル・ダウダル)にポールはしたしむ。ジャンはふたごの共犯関係からのがれようとなにかと努力するが、そのつどポールによって(なかばはじぶんの意志で)脱走計画はついえ去ってしまう。ポールはじぶんをジュール・ヴェルヌの『80日間世界一周』の主人公、なにごとにつけても冷静沈着にして正確無比なイギリス紳士のフィリアス・フォグに、ジャンをおっちょこちょいで機転がきくそのフランス人従僕ジャン・パスパルトゥになぞらえる(普通名詞 *passee-partout* がどのとびらをもあけることができる「親鍵」「合鍵」であることから、まさに象徴的な名である)。このほかトゥルニエが周到に用意し配置した二項対立を列挙すればそれはきりがなく、またあまり意味もない作業なので、アルレット・ブルーミエがそれについて簡便な表を作成していることを述べておくにとどめる⁵³⁾。完全に同一と見られていたふたごに、こうして対立と不均衡とがもちこまれる。トゥルニエがなんらかの単一のモチーフをくりかえすばあい、それは世界の神話におなじモチーフが存在することを念頭においてのことであろう⁵⁴⁾。するとこの相補的に正反対の兄弟という主題はいったいどのような神話を祖形としてもっているのだろうか。

「アダム一家」をここでも手がかりとしてみよう。そこでは『創世記』第4章第1-16節の記述どおりに、楽園喪失後はじめての罪=兄弟殺しがおこなわれる。しかしそれにさきだって、そこにはすでに神の創造のまねびという一種の罪が前提として存在したのである。すでに紹介したようにアダムとエヴァはほんらい同一の体をもっていたが、プラトンの『饗宴』でアリストパネスが語っているアンドロギュノスのようにふたつの部分にわけられたものである(この部分はシスター・ゴータマの仮説にほぼ一致)。アダムは遊牧民、エヴァは定住民である。楽園追放後⁵⁵⁾に息子たちの物語がはじまる。長男カインは母に似て定住農耕民の気質、弟アベルは父親似の牧人である。兄は鋤と鍬で土地をたがやし、楽園の再現といったおもむきの菜園をつくる(『気象』後半部の人工庭園に符合)。神の創造行為のこういった模倣に人間の傲慢と反逆を見てとったヤハウェは、アベルがささげる子やぎや子羊をよみし、カインがささげる花や果実をつきかえす⁵⁶⁾。そしてある日アベルの家畜が群れをなしてカインの麦畑と果樹園に踏みこみ、アベルがそのことについてあやまるところか兄にたいして軽蔑的な態度に出たため、カインはかっとして鋤で弟を殺してしまう(以下略)。カインとアベルの神話が、ここではトゥルニエによって説話論的にふくらまされて再話がなされているのがわかるだろう。そしてこの神話は『気象』第21章にすがたをあらわすのである。1961年のベルリンのソヴィエト地

区でジャンをまちうけるポールは、突然はじまった壁の建設という神話的な光景にたちあうことになる。贖罪教会のゼーロス神父はベルリンの状況について説教する。

「〔…〕ドイツ人がおなじドイツ人に銃をむけて発砲するのを見てきましたし、悲しいかなこれからも見ていくことになりましょう。しかし兄弟殺しはどんな世代、いつの世にも、見られたではありませんか。カインはアベルに言った「さあ、野原へ行こう」。そして彼らが野にいたとき、カインはその弟アベルに立ちむかって彼を殺した。〔…〕

この最初の兄弟殺しが、人類の伝説や歴史の場で手本の役を果たしたといえます。ヤコブとエサウはふたごの兄弟ですが、聖書によれば生まれるまえから母リベカの胎内で争っていました⁵⁷⁾。それにレムスとロムルス、アンピオンとゼトス、エテオクレスとポリュネイケス、みな兄弟どうし敵対し、兄弟殺しをなしてきたのです…」
[515]

ここに列挙されるのは古典世界における、あい争う兄弟たちの系譜である。

『創世記』でエサウは父イサクに愛され獵人となり、ヤコブは母リベカに愛され「天幕に住み心一途な人となった」⁵⁸⁾。トゥルニエはここから母→定住、父→遊牧の図式をカインとアベルに導入したのではあるまいか。ちなみに母のお気に入りではじぶんであったとポールはいう。いっぽうジャンが父に気に入られていたかという、父はふたたりを区別することすらできないありさまである。

父はある日、本気半分冗談半分で決めた。「ふたごをかたっぽずつわけようじゃないか。マリア＝バルバラはジャンをとりなさい、お気に入りだろ。わたしはポールのほうにするから」。さてマリア＝バルバラのお気に入りには、ぼくのほうだった。母はそのときまさしくぼくをかかえていたんだ。そしてジャンはというと、あっけにとられていたというか、やっぱり半分むっとしていた。だって父が抱きあげてつれてくふりをしたのはジャンのほうだったんだから。[142]

ポールがとくに母の気に入りだったという記述はこの部分をのぞいてはとくにしるされていないので、これを愛情をこめて母を回想するポールの独断ときめつけるのはたやすい。しかし小説の冒頭でマリア＝バルバラが子どもにもとめていたものをみみると「ふたりの末っ子がこう奥手で成長がおそいと、マリア＝バルバラは落ちつくし、安心だ。〔…〕子どもたちが凍った魚や肉の燻製を噛めるようになるくらい、というから3、4歳になるまで、エスキモーの母親は乳をふくませるといふのをあるとき読んで、彼女は感動した」[8]とい

うふうに、子どもをいつまでもそばにおきたいという意志が見える。とするならば、定住民の資質をもつポールがあるいは運命的に母の寵愛をうけていたのかもしれない（ちなみに母は対独レジスタンスに連座したかどでナチの捕虜となり、二度とかえってこなかったが、それはもちろんジャンの出奔よりもまえのことである）。母に愛されて天幕にとどまった定住民ヤコブがポールにつながってくるのはここだけではない。じぶんが愛するダニエル少年をみずからの「ふたごの兄弟」にしようとかんがえながら（Ⅱ-5を参照）、アレクサンドル叔父がヤコブとエサウについて考察している箇所をここに引用してみよう。

ヤコブとエサウという敵対双生児について、聖書には母親の腹にいたときから争っていたと書いてある。エサウがさきに生まれてきたとき、弟にかかとをひつつかまれてたとも書いてある。いっしょにからみあって生きてた母胎のリンボから兄弟を出してやるまいとしたんだ、それ以外かんがえられない。[215]

このようにアレクサンドル叔父の解釈では、子宮から出ていこうとする遊牧民エサウをヤコブがひきとめようとしたことになっており、このすがたはのちのジャンとポールの関係にそのままスライドすることができるだろう。

壁建設によるベルリンの分裂劇がポールとジャンを永久にひきさいてしまう。『気象』でポールの遍歴の最終段階を用意することになる、この壁の建設は、双生児の分裂に完全にかさなるのだ。神父がヤコブとエサウのつぎにふれるふた組こそ、あい反する神話的双生児と壁の建設（都市は近代以前には城塞都市であり、壁の建設はすなわち都市の誕生である）との密接な関係を物語る祖形にほかならない。レムスはロムルスがローマの壁をつくるのを妨害してロムルス（一説にそのなかまのケレル）に打ち殺されたとされる⁵⁹⁾。またゼウスとアンティオペの子で「テバイのディオスクロイ」とよばれるアンピオンとゼトスは敵対関係こそないものの、もの静かな音楽家の前者と活動的な武人である後者の意見はしばしば対立した（アンピオンはヘルメスからさずかった豎琴の音で石材をうごかして城壁をつくったことで知られる⁶⁰⁾。さいごのエテオクレスとポリュネイケスはオイディプスの息子たちで、アンピオンとゼトス同様テバイをめぐる意見が対立し、こちらは決闘のすえたがいに殺しあってしまう⁶¹⁾。この物語は、エウリピデスの「フェニキアの女たち」のもととなったものである。このように「対立する兄弟」の主題は、しばしば都市の誕生へとむすびつけられるのであり、トゥルニエがベルリンの壁の起源神話としてジャ

ンとポールの分裂を語っているのだともいえるだろう。またひとつのものを争う双生児という形象は、たとえばディドロの『ダランベールの夢』で医師テオフィル・ド・ボルドゥがあげているラバスタンスのシャム双生児をおもわせるものである⁶²⁾。つねにどちらかいっぽうに仮死状態が交互にあらわれるこの双生児を、ボルドゥはカストルとポリュデウケスにたとえている。

しかし同じ「兄弟殺し」を前提としながら、逆に双生児が愛と平和の表象として語られるという逆説的な現象も『気象』にはみうけられる。

[...] 人間はだれでももともとふたごの兄弟を持ってる。妊婦はだれでも胎内に子どもを「ふたり」かかえてるんだ。けど強いほうは兄弟がいるのががまんならない。なんでもわけあわなきゃいけないからね。で、母親の胎内でしめ殺しちゃうんだ。そして、しめ殺したら食べてしまう。それから生まれてくるもんだから原罪にまみれてるし、孤独という刑に服して、罪の烙印として化けものみたいに背が高くなるってわけ。[...] ぼくたちだけが、いいかい、ぼくたちだけが潔白なんだ。ぼくたちだけさ、手に手をとって、くちびるに兄弟愛のほほえみをうかべてこの世に出てきたのはぼくたちだけなんだよ。[169-170]

ここでは前述したエサウとヤコブの争いが胎内での兄弟殺しへと発展している。人間の起源に双生状態を措定している点はシスター・ゴータマの畸形起源論とおなじであるが、ふたつの相違点がある。ひとつはシスター・ゴータマのほうが人間の系統発生の側面を問うのにたいし、ポールが問題にしているのは個体発生としての人間の誕生であること。もうひとつはシスター・ゴータマの仮説では双生状態との訣別はプラトンの『饗宴』のアリストパネスのアンドロギュノス説をおもわせる「分離」というかたちをとっており、双生状態への牧歌的な郷愁すらおびているが、ポールの説ではそのわかれば双生児の一方が他方を食ったのだという、カニバリズムというすぐれて神話的なイメージへと化している点である。ポールにとっては、胎内で平和に共存できたカップルだけがえらばれて双生児として現実世界へとおくりだされるのだ。すべての「単独者」たちは原罪としてこの兄弟殺しというケガレをせおった存在であり、つまり双生児の異形は聖性いがないのものではなく、双生児がしばしば肉体的に虚弱で小柄なもの同胞を食っていないせいだとポールは説いているのである。

以上のように『気象』のなかで神話的雙生児のイメージにつきまとう「相補性」のあらわれをみてきた。II-2であつかった「同一性」とこであつかった「相補性」とがカップルとしての双生児をとりまく状況である。とすれば、

このきずなが分裂へとむかったとき、カップルのひとりひとりにおとずれるのはどのような状況であろうか。

4. 鏡像と分身

『オーヌの王』の主人公ティフォージュはその「不吉な手記」で、「怪物」が「見せる」ことに由来すると書いたあと「怪物にならないためには、同胞に似ること、種に一致すること、せめて両親とおなじすがたをとることだ」⁶³⁾と述べている。しかし同胞 (semblable) にあまりに似ている (semblable) ばあいになると、それは過度の類似≒同一性というもうひとつの過剰にいきつくのではないか。じっさい彼はカルテンボルンの国家政治教育施設ナポラのもとはたらきながら、ハロとハイオというひと組の酷似した双生児に魅せられてゆく。

彼はそれまでずっと双生状態というものに魅せられてきた。深いところになにか生命力を包蔵していて、そこで肉体が魂をがんにがらめにして、じぶんの気まぐれに隷属させているように、彼には見えるのである。自然の気まぐれによって、自発的にか強制的にか、いっぽうの存在に他方の存在の内面の秘密がすべて打ち明けられる。それはいっぽうが他方の *alter ego* (もうひとつの自己) になっているからだ。⁶⁴⁾

ティフォージュのまえに完全な「一対一対応」の神秘が開示される。そもそも彼は「いっさいは徴である (Tout est signe.)」⁶⁵⁾ というその信念どおり、じぶんをとりまく小さな世界 (マイクロコスモス) と全世界、さらには全宇宙といった大きな世界 (マクロコスモス) とのあいだに照応 (correspondance) を読みとり、解説しようところみてきたのである⁶⁶⁾。そこにあらわれた双生児は、たがいがたがいの完全に同尺の索引——もうひとりのじぶん (*alter ego*) である。その現象はボルヘスが『汚辱の世界史』の「エトセトラ」に引用した「実物大の地図」の幻想があたえるめまいにも似たおどろきへとつながってゆくのだ。ハロとハイオがナポラに入学してくると、ティフォージュはさっそく綿密な検査をとりおこなう。行動パターンの相違ではハロのほうが主導権をにぎることが多く、ハイオはつねに防禦的であり、ここでもII-3でとりあげた相補性があらわれている。ティフォージュはふたりの身体的な、目に見える差異をさがそうとやっきになるが、それは意外なところみつかる。ひとりの人間の右半身と左半身は完全な線対称ではなく、かならず微妙な相違があるものだが、ハロの右半身はハイオの左半身に、ハイオの右半身はハロの左

半身に、それぞれびたりと一致するのだった。この反射型双生児 (jumeaux-miroirs) は、文字どおり生きた、3次元の鏡像ということができただろう。

さて『気象』にはこの、1個の身体を解読する鍵としてのふたごの兄弟というモチーフが継承され、ポールがジャンをじぶんの「生きた索引」としてとらえることになる——「[...] ぼくにはじぶん自身の、生きた、正真正銘の絵姿がある。ぼくの謎をみんな明らかにしてくれる暗号解読用のグリッドがある。ぼくの頭を、ぼくの心を、ぼくの性器を、なんの齟齬もなく開けてしまう鍵がある。この絵姿、このグリッド、この鍵、それはぼくのふたごの兄弟、きみなんだよ」[247]。これにさきだつ箇所ではポールは、鏡や写真はうそつきであり、もうひとりのじぶんであるふたごの兄弟がもつ全体の同一性にしくものはないとしている。だからこそ、つまり、鏡や写真にうつつているそのすがたが、ほんとうにじぶんなのか、という疑問がおこってくるからこそ、かえってジャンとポールは鏡や写真に翻弄され、あるいはおしえられることになるのである。

ふたりがはじめて身分証明書をつくるとき、エドゥアールとポールはどちらかかたほうが証明写真を撮ればいと主張するが、ジャンは猛反対する。けっきょくふたりは駅の自動撮影ブースにはいって6回ずつフラッシュを浴びる。その夜エドゥアールは写真をばらばらに切りわけ、うっかりしたふりをして12枚をまぜてしまい、じぶんのぶんとるようにジャンにいう。けれどもジャンには、どれがじぶんの写真でどれがポールの写真かわからないのだった。

心臓が不安に締めつけられると同時にほおに血がのぼった。ほかに類のない、そのころはじめて知ったとくべつな不安だ。[...] ポールとジャンを見わけるといふ、ぼくらのまわりでみんな日に何度もぶつかってる問題に、はじめてぼくは直面して、びっくりしたんだ。[...] 嗚咽がのどにこみあげてきたけど、もうわあわあ泣く齡でもなし、どうにかいい顔をつくってみた。[242]

II-1の冒頭に引いた、期せずしてジャンがポールとおなじ衣類を買ってしまった「デパート事件」とならんで、このできごとを、ジャンは「ふたつのちょっとしたこっけいなエピソード」とよんでいる。家族にとっては笑いぐさであるにしても、「卵形の愛」の重圧に苦しむジャンを追いつめるにはじゅうぶんなこのふたつのできごとが、「ふたごのフラスコにひびを入れた三面鏡事件」へとつながり、子ども時代を終わらせた、とジャンはみなしているのである。アルテル・エゴという自己の完全なインデックスをもたない「単独者」に

はこのようなことはない。たとえば『黄金のしずく』の主人公、北西サハラのタベルバラというオアシスに住むイスラム教徒のイドリース少年は、じぶんがうつった写真をじぶんの一部、うしなわれた半身としている。つまり彼はある日とつぜんやってきたヨーロッパ人女性に写真を撮られるのだが、その写真にふたたびめぐりあうためにフランスへと旅立つのである。この発想はさらに、『ガスパール』におけるバルタザール王のような肖像嗜好症につながるだろう。王子時代、彼はある肖像画に恋するあまりその肖像画を手がかりに妻をえらび、うまれた娘がその肖像画に似てくると娘にそれをさずけるのだ。これらがいずれも「あらかじめ失われた半身」を渴仰する行為であることはまずまちがいない（II-5）。われわれはかつて、バルタザールが恋着する肖像画が古い鏡の面をふさいでかかれていることに注目してきた⁶⁷⁾。トゥルニエにあっては写真や肖像画と鏡はおうおうにしておきかえが可能なのではないだろうか。

「デパート事件」の少しあと、あいかわらず単独行動の不安な高揚感をたのしんでいた13歳のジャンは、ある春の土曜日、ふと立ちよった店で帽子のかぶりぐあいとたしかめるために試着室へとはいってゆく。試着室の三面鏡で彼を待ちうけていたのは、三方から彼を見つめかえす「鏡のなかの他人」であった。

だれかがそこにいた。あのちっぽけな空間のなかで、3つになってすがたを映していた。だれ？ たずねたとたんに、雷みたいな音をたてて答えが返ってきた。「ポールだ！」〔…〕まさにそのとき、ぼくのなかにぞっとするような空虚がぼっかりできて、このまま死んでしまうんじゃないかって不安で凍りついてしまった。だってポールがここにいて三面鏡のなかで生きてるんなら、ぼく自身は、ジャンは、ぼくはもうどこにもいない、もう存在していないじゃないか。[246]⁶⁸⁾

「鏡のなかの他人」のモチーフは分身テーマの反転したあらわれともいえるべきものである。鏡のなかに他人を発見するおどろきは、ある意味では特異なかたちによじれたナルシズム状況ともいえるだろう。ポールのほうはジャンぬきにはじぶんの存在を確立しえないのだが、それとは正反対に、上の引用の最後の部分にもあるように、ポールの存在は「逆ドッペルゲンガー」としてジャンの存在をあやうくするにいたっている。このほか、ポールがヴェネツィアで、鏡によってみずからの運命についてなにがしかの黙示をうける場面（ルネサンス期にはヴェネツィアの鏡製造技術は世界の頂点だった）もあるが、本稿の流

れでは割愛せざるをえない。しかし「三面鏡事件」においても「ヴェネツィアの鏡」（これはその第15章の章題そのものとなっている）の黙示においても、鏡にむかうものがそこにうつしだされるものに——鏡のまえのアリスのように——つよく魅せられつつもいざしくおそれが、意識変容状態への入り口となっていることが指摘できる。ヨーロッパで古来つかいふるされて力をうしなつたかにみえる「アレゴリーとしての鏡」は、トゥルニエの世界ではいつでも息をふきかえし、のぞきこむものをひきずりこみさえするのだ⁶⁹。鏡が古来より宗教儀礼には欠かせない「まじもの」であったことをおもえば、『気象』や『ガスパール』のなかで鏡がもつ呪術性は納得できるだろう⁷⁰。

II-2, 3, 4で、われわれは神話的双生児の異形と異能、つまり彼らを圍繞する幻想文学的モチーフを、「同一性」テーマ、「相補性」テーマ、「分身」テーマというふうにとりあげてきた。これらはすべて双生児というのが通常のカップルにはありえない特殊な人間関係であるという前提から出発している。そして、やがてはポールやシスター・ゴータマのような、人間存在の根源に双生状態を措定するヴィジョンへと歩をすすめてゆくのである。

5. 同性愛+近親相姦<双生状態

エドゥアールの弟アレクサンドルもまた、ティフォージュとおなじように、双生児に心惹かれ魅せられてゆく倒錯者である。かれは死んだ長兄ギュスターヴのあとをついで「都市家庭塵芥収集会社」をとりしきっている。「塵芥のダンディ」を自称するこのおくれた貴族主義者は、また異性愛者の秩序の鼻先に過激なアンチをつきつけるスクャンダラスな同性愛者でもあって、ときとして少年を狩る「ハンター」と名乗ることもある。彼の周囲にはさまざまな青年たちや少年たちがあらわれる。たとえば少年期には、レンヌのタボル学園（第2章）の少年結社フルーレで僚友だったトマ・クーセク⁷¹（のちに神父となってアレクサンドルと再会する）およびラファエル・ガネシャ⁷²。成人後は、ヴァンセンヌの森でハントした動物園飼育係ベルナル（第5章）、ロアンヌでやとった人夫のひとりウスタシュ・ラフィユ⁷³（第4, 7章）、カサブランカでアレクサンドルが殺害される遠因ともなるムリリョ⁷⁴（第13章）など。そのなかで小説中もっとも重要な役割をはたすのは、ロアンヌの安下宿《ランデヴー・デ・グリユティエ》の女主人の息子でウスタシュの愛人でもある、14歳にしかみえない18歳のダニエルである。ダニエルに惹かれたアレクサンドルは、駅舎にくみこまれた高級なターミナルホテルと下層階級にふさわ

しい≪グリュティエ≫の2軒を根城に、ロアンヌで二重生活を送ることになる。

ダニエルへの愛情はだんだんと運命的なものへと深まって、ついにアレクサンドルは彼をじぶんの「ふたごの兄弟」にすることをかんがえるにいたる。

おれと正反対の服を着せるなんてごめんだ。おれの「悪趣味」にいたるまで、おれに似てほしい。ダニエルはダンディになるんだ、おれみたいに。

おれみたいに？ いっそおれと「そっくり」なんてどうだ。現物にたがわぬおれのコピーでもいいだろう。[213]⁷⁵⁾

[...] ダニエルはおれの6つポケットの [...] 刺繍入りのヴェストにおれの南京木綿のパンタロンをまとして、おれの腕とってレストランかホテルにはいってくんだ。おかしなそっくりさんだ。年がうんと離れてるからふたごの息子だな。いや30年まえの、世慣れないけどいきいきした、無防備でむきだしのおれ自身か。[216]

脆弱でいつも病みあがりのようにはないダニエルにたいする愛情の基調が、ほかでもない憐憫にあることをアレクサンドルはたびたび語っている。そしてそれは若いころのじぶんをダニエルにオーヴァーラップさせているところからきている——「ナルキッソスはおのがすがたをのぞきこんで、憐憫の涙を流す」[214]。これよりすこしまえ、アレクサンドルは古本屋の店さきで手にした語源辞典にみちびかれて、さまざまなものごとを語源から考察するという子どもじみたたのしみにふけているのだが、ここにもその一例がでてくる。つまりアレクサンドルによれば、夜がおとずれるとみな男も女も、昼のあいだ「存在」していたことにつかかれてしまうのだが、その事実はフランス語 *exister* (存在する) がラテン語 *sistere ex* (=être assis dehors, 外にすわっている) からきていることにもあきらかだというのである。その疲れをいやすために人間はだれも夜になると反対方向に生まれる (*naître à l'envers*) = 「遡生する」(*dénaitre*) 必要があり、そのために「ベッドのかたちをとった疑似おかあさん」が各家庭、各寝室にそなえられるというわけだ。ここで注目しておきたいのは、ベッドの存在意義について、アレクサンドルが「ゴム製の、ふくらまして使う人形で、水夫が強制禁欲をごまかすのに抱くあれ」[214] つまりダッチワイフのようなものだといっている点である。アレクサンドルはここで、性的なものを前性的 (*présexuel*) な意味合いでとらえているのであり、けってその逆ではない。したがってアレクサンドルが倒錯者であるということとは、ティフォージュやバルタザールがやはりそうであるように、セックスが

秩序の制度——「再生産をおこなうワッフルの焼き型」[215]——として確立され抑圧される以前（もちろん時間的な「以前」というよりもむしろ根源的な「以前」である）の自由への溯航をこころみる前性的人間だということにはかならない。危険な実践と共同体への挑発をともなったこの初源への果敢なアプローチは、当論文でたびたびとりあげてきたラルエ、ベアトリス、ゴータマらの原初への妄執とむすびつくものであるようにおもわれる。じじつアレクサンドルは、再現された疑似子宮としてのベッドをダニエルとともにすることについて、以下のように述べている。

〔…〕ベッドが母親の腹なら、そこにやってきて、遡生しつつおれといっしょになる男は、おれの兄弟以外にありえない。ふたごの兄弟だ、とうぜん。〔…〕

いとしいダニエル、遡生しておれの胸に落ちるとき〔…〕おまえはおれの愛人じゃない。愛人なんてヘテロの腐った匂いがするグロなことばだ。おれの弟でもない。おれじんだ。そっくり同じものどうしカップルでバランスをとって、おれたちは白くて暗い母なる大船に乗って流れてゆこう。[215-216]

このとき彼がめざしている人間関係のあなたにひとつのアイデアとして、II-2でとりあげた、ジャンとポールのウロボロスの閉鎖系がみえてくるだろう。

このようにアレクサンドルは双生状態につよく心惹かれるけれども、そのころみは失敗におわることになる。たとえば彼は第7章「フィリピン真珠」で、ロアンヌの名家の末裔で、若くて美しいレズビアンファビエヌ・ド・リボヴィエから、ふとしたことで彼女の母親の代の古い血塗られた因縁ばなしを背負ったひと組のフィリピン真珠のイヤリングをもらうことになる。いびつないわゆるバロックで、「大きさも並だが、ふたごの姉妹ばりにそっくりなうえに左右のちがいがわかるようにならんでいる」[185]。ふたつそろりと「一生あそんでくらせるほどの」[227] 値段になるがひとつひとつではろくな値にならない——これは、双生状態にあっては完全に外部を遮断できる力もちながら、ひとりひとりとは体軀も小さく死亡率も高い、双生児そのものではないか。そして通常ひとつの殻にひとつのところを、ふたつの真珠がひとつの貝にはいつているところはまさに子宮内の双生児をおもわせる。フィリピン真珠は双生児の紋章なのだ。ミラマでの再会を期してアレクサンドルがダニエルにそのかたほうをあたえたのはこのためであろう。しかしダニエルとふたりでフィリピン真珠を頒かちもつ双生状態の夢は消える。ダニエルはアレクサンドルに会うために、埋めたて地になる予定の、無限に広大なミラマの塵芥収集場に

やってきたが、アレクサンドルがそのすがたを見たときにはダニエルは、生ゴミを栄養にして異様に肥えふとったラットの大群におそわれ、月光のもとですでになかば骨と化してしまっていたのだ。夜明けが近づき、これまた怪物じみた巨大なカモメの群れがいつものようにラットたちをおそいはじめる。

ダニー…。おれはこれをさいごと、かつて顔だったもののうえにかがみこむ。両眼は眼窩の空洞をさらし、ほおは喰いちぎられて歯が見えている。そして耳は…。真珠母色のかがかやくものがひとつ、見るもおぞましいこの顔の横に。身をかがめるとフィリピン真珠のイヤリング。そのふたごの姉はおれが持つてる。おれのところにくるから、ダニエルはこれをつけてたのか！ この魔法のイヤリングが、ききわけのない生徒の耳を引っぱるみたいに、ダニエルをおれの車両のほうに引きよせたんじゃないか、そんなことまでかんがえてしまう。[264]

ダニエルをうしなしたアレクサンドルは、第11章ではドイツ軍占領下のパリにおいては、ロアンヌいろいろの盟友で、みずからのもうひとつの分身ともいべき犬のサムにも逃げられ、あらためてひとりになってしまう。少年ムリヨをめぐる、カサブランカ港のピーナツ倉庫でアラブ人たちとさしちがえることを覚悟した彼は、あえて挑発的にフィリピン真珠のイヤリングを両耳につけたまま死地へとおもむく(第13章)。このように、フィリピン真珠がアレクサンドルの運命を左右するほどの力をもっているといっても過言ではないだろう。

アレクサンドルが心惹かれるものはかならず双生状態の刻印が押されている。たとえばコピー。彼はまがいものの古い家具の愛好家⁽⁷⁶⁾で、ほんものよりも模造品をこのみ、ギリシア哲学の図式をパロディ的につかってそのコピー趣味を説明する——「アイデアは物にまさり、アイデアのアイデアはアイデアにまさる。よって、模造品は模造される物にまさる、なんとすれば模造品はその物プラス模造の努力だから」[86]。「模造の努力」が前述のダニエルの双生児化につながるかどうかはおくとしても、じっさいアレクサンドルは「アイデアのアイデア」や「コピーのコピー」といったものの二重性を崇高なものとして渴仰している。かれがダニエルに魅せられるのも、もとはといえばダニエルがウスタシュのもの、つまりじぶんの「獲物の獲物」(第4章の題)だったからにはほかならないのである。またコピーとともにアレクサンドルが気にかけるのが遍在性である。カサブランカで彼は「遍在者」⁽⁷⁷⁾とよぶことになる少年に出会う。あるところでみかけた少年が、そのすぐあとまったくべつところで発見されるの

だ——「あの子が空中飛行の能力をもっていると認めるべきだろうか？」[326]。1度目に出会ったときはなんともおもわなかったのに、おなじ日に2度目に出会ったときにつよく心惹かれるのはなぜか、それはじぶんが遍在性に恋しているからだ、と彼は自問自答する。しかし「あれはふたごの兄弟なのは？」という避けたいが避けがたい仮説がアレクサンドルのなかでじょじょに頭をもたげはじめるのだ。

遍在と見えたのは、ただ双生状態が隠れてただけだったんだ。それは一時的にこわれた双生状態でもある。遍在して見えるには、ふたごが連続して、べつべつにあらわれなければならないからだ。[...] 遍在しているように見えたのは、じつはふたごの「かたわれ」だ。つまりその横には空白、つよく「存在を呼ぶ声」、兄弟不在の空白があって、いやおうなしにおれはそこにすいこまれたわけだ。[330]

けっきょくアレクサンドルは「遍在者」が泊まっているホテルに問いあわせて、彼らがジャンとポール・シュラン——じぶんの甥たちであることを知らされるが、ふたりにもエドゥアールにも会おうとはせずに死んでしまう。双生状態にこがれる単独者はこうして双生状態と遍在のかくれた関係をつきとめる。いっぽうポールは、ジャンを追って世界をめぐらううち、ジャンに会った人たちから必ずジャンだとおもわれる運命にある。そして旅の果てにポールは、おなじ真理を逆方向から把握する——「引きはなされた双生状態＝遍在性」[536]。

本節ではジャンとポール（そしてわずかながらアレクサンドル）をめぐる、双生児の異形性、そして異形ゆえに措定された根源性にふれてきた。人間関係の根底に双生状態を夢想する『気象』の一大公式についてトゥルニエは、のちに『精霊の風』の「気象」と題する章をまるまるあてて、双生児と異能、超常現象、性的逸脱の関係について『気象』をたたき台に論じている。

ふたりのパートナーどうしの直接かつ完全な調整が、双生児には誕生時からあたえられている。[...]

彼らの同性愛や近親相姦について語るべきか？ まずその必要はない。このふたつの語がたばになってかかっても、弱すぎて双生児の現実を説明できないのだ。[...] これこそ真正銘のオリジナルで、近親相姦と同性愛がその不器用なコピーをとっているのである。⁷⁸⁾

遍在性＝引きはなされた双生状態

この公式は、街のなかの離れた複数地点に、数分間隔であらわれるふたごのかくれ

んぼを見て、アレクサンドルの脳裡にひらめいた。つまり、はじめ彼がおもったようにもただひとり的人物しかいないのなら、遍在の才能がなければならぬわけである。これはポールが小説全体の結末で発見した公式の逆だ。E=mc²の公式がアインシュタイン物理学をかざるように、ポールの式が小説をかざる。

引きはなされた双生状態＝遍在性⁷⁹⁾

『気象』全体をつうじてあらわれる、アイデアとしての双生状態のイメージ、そのあらわれのひとつひとつがあまりにも多様で、ときには両立しえないほどの矛盾をかかえているように見えること⁸⁰⁾は、冒頭に指摘したとおりでである。しかし本節で（そしてその考察は必然として、つねに「異形」の考察へとくりかえしくりかえしもどることになったが）、神話・象徴的レベルではそれらの表象がたがいに通底することをわれわれは確認しえたとおもう。かえてその矛盾すれすれの過剰なまでの多様性ゆえに、「この世ならぬものたち」としての双生児のイメージは、豊饒なものとなっているのではないだろうか。

III 排除される逸脱者たち

1. 同性愛と異形

『オーヌの王』で、怪物にならないための条件についてティフォージュが書いていた部分を、もういちど、こんどはすこし長く引用してみたい。

怪物にならないためには、同胞に似ること、種に一致すること、せめて両親とおなじすがたをとることだ。または子孫を持つこと、それなら新種の増殖という鎖で1番目の輪になれる。怪物は繁殖しないのだ。6本脚の仔牛は育たない。騾馬やけっぺい〔騾馬とは逆に牝驢馬と牡馬の雑種〕には生殖能力がない。実験が失敗だとおもったらさっさと切り上げるのが自然の意志というやつなのだろう。⁸¹⁾

怪物の定義はさまざまであるが、ここでは引用にしたがって自然の気まぐれの結果としておこう。上のティフォージュの命題を論理学でいう「逆」にすれば、怪物の特徴のひとつがうかびあがってくる。すなわち生殖能力の欠如である。さて、神話の文脈では、能力の欠如（生殖できない）と意図的な反逆（生殖しない）は等号でむすばれる。古来、怪物を宗教的に認知するかどうかでキリスト教内部には論争があったが⁸²⁾、一見その争点は形態異常にあったように見えながら、じつのところは生殖という義務への不参加という、いってみれば宗教イデオロギー的な問題が隠蔽されていたのではないか、と仮想してみたい。

ヘブライズムの出発点ともいべき『創世記』の第9章第6—7節で、洪水をのりきったノア一家と契約をむすぶまえに、神は彼らを祝福するというには——「人の血を流すものがあつたら、／他の人によってその血は流される。神はその像かたちの通りに、／人をお創りになったから。／君たちはふえかつ増して、地に満ち、地を支配せよ」⁸³⁾。ここに宗教イデオロギーの命題がいくつか読みとれよう。

- i) 人間とは神の姿のコピーである〔明示された大前提〕
- ii) 人間の義務は増殖することにある〔明示された小前提〕
- iii) 人間の義務は、神として地上を支配することである〔隠蔽された結論〕

『ガスパール』のバルタザールは聖書を読むことで、この論理を発見することになる⁸⁴⁾。くわえて、バルタザールの国のようにセム系の宗教で偶像崇拜が禁じられ、肖像画や人物彫刻が忌避されていることをかんがえれば、生殖以外の方法による人間複製の禁止がかくされてあることはあきらかであろう。なんとすれば、それは神が土をこねて単性生殖的にアダムを創造した行為のまねびであり、反逆として解釈されるからだ。この違反には以下のようなものが想定される（すでに存在する人間の個体数を減少させる殺人および自殺をのぞく）。

- A. 生殖のリンクへの不参加
 - A 1. 同性愛その他の性的倒錯
 - A 2. 膣外射精（オナン）、転じてマスターベーション
 - A 3. 不妊
- B. 神の創造への挑戦
 - B 1. 偶像崇拜
 - B 2. 人造人間の作成
 - B 2 a. アンドロイド（アルベルトゥス・マグヌスの伝説⁸⁵⁾）
 - B 2 b. ホムンクルス（ファウスト伝説）

むろんこれは便宜的な分類であり、たとえばB 2 aに属するピグマリオンズム（人形愛）はまたB 1にもつながる。ばあいによってA 3以外のすべてがA 1へと収斂される可能性もある。ここで注目したいのは、怪物の条件である生殖能力の欠如がA 3の変種としてみとめられる点だろう。上の表に怪物が参加

することで、たとえばメアリ・シェリーのフランケンシュタイン博士のように傲慢の罪をまぬがれえない、B2に相当するマッドサイエンティスト、つまり怪物をつくるものが、怪物そのものと同列になってしまう。怪物はえらんで怪物になったわけではないが、この論理では意図の有無を顧慮することがない。さらに注意すべきことに、倒錯者さえも怪物と同罪となってしまうのである。

トゥルニエの小説にしばしば登場する性的倒錯者たちがあきらかにするのはこの事情なのである。アレクサンドルの、生殖行為にたいする深い軽蔑と呪詛は、本稿Ⅱ-5の引用にもあきらかなように、かれの語りのなかでもきわめて大きな要素となっている⁸⁶⁾。そもそもダンディズムじたいがその反自然への志向性によって同性愛とむすびつけられているのは、オスカー・ワイルドの例を出すまでもない（ダンディズムはキリスト教を前提とするものなので、古代ギリシアの同性愛はやや事情を異とする）。アレクサンドルがなにかとというと孤独を愛し、孤高であることを重視するのには、かれのいう「ヘテロども」が群れをなすことへの、またかれらがそのことに無自覚なことへの、いわばイデオロギー的な揶揄の側面があるのではないだろうか。

アレクサンドルはまた、じぶんの同性愛がどのようなものなのかについて、文化人類学の言説を戯画化するかのような語りくちで説明している。かれは3重の同心円を呈示し、中心からA, B, Cとする（これは聖ブリジット学園の障害児サークルにつづいてあらわれるふたつめの同心円である）。Aは家族、Cは野蛮な未知の領域で、それぞれ族外婚（exogamie）と族内婚（endogamie）のおきてによって性的探索を禁じられており、それは異性愛者たちによっておしつけられた制度だという。そしてアレクサンドルによれば、かれの性欲はきわめて強い遠心力を有しているのだ。じじつ成人したアレクサンドルが関係をもつ青年、少年は人夫や飼育係など、下層階級とみなされていた肉体労働者たちである——「セックスの遠心力でおれは、じぶん自身の外にほり出されて、だれかの腕のなかや股のあいだにいた…。だれでもいい。取次人、肉屋の小僧、配達人、運転手、体操選手、などなど、若い男で、素性や出がいがいしくておれの育ちから遠ければ遠いほど、おれは強い魅力を感じた」[287]。またフェンシングの達人で男以上の男を自負する彼の同性愛の根底には同時に、求心力としてのナルシズムもあるという——「[...] 同性愛の源泉にはナルシズムがあって、おれが他人の性器をつかんでよろこばせる手だれなのも、飼いならしたりおだてたり、じぶんので経験を積んできたからだ」[288]。アレクサンドルは、したがってじぶんの同性愛は族内婚、族外婚の双

方にそむき、異性愛を二重に愚弄するものだと結論づける。

〔…〕おれはいつも獲物を「遠すぎる」ところでさがしてきた。Cの領域は族内婚の掟では禁漁区だ。だがその獲物はおれと兄弟関係、同一人物としてのナルシスティックな関係をもつ——いってみれば族外婚の掟で禁じられた中心の円Aにつれてって、そこでいただくわけだ。おれの独創性、「はらわたにしみこんだ犯罪」てやつは、ひとえに中間地帯Bに興味がほとんどないのが原因だ。[288]

ブルーミエにならってアレクサンドルを「あい反するもの的一致」の乱暴な体现者としてみることもできよう⁸⁷⁾。たとえば男以上に強い男でありながら、女から男をうばう女以上の女。ロアンヌで、ターミナルホテルでは市のおえらがたから「ムッシュ・シュラン」と呼ばれ、《グリュティエ》では人夫たちから「アレックスさん」と呼ばれる二重生活。頭からつまさきまで一分のすきもなく完璧に着飾るダンディにして、塵芥の王国に君臨する王。いずれも対立するふたつの要素をないあわせるアレクサンドルの「ひとり双生児」のあらわれである。この二重性についての研究はべつの機会にまわして、ここではほんらいの流れにもどって、「異性愛者」や「単独者」の世界が異形を排除するのに対抗するアレクサンドルが『気象』ではたす機能をみていくことにする。

2. 制度への挑発行為

ロアンヌでアレクサンドルが管理することになるのは、「悪魔の穴」とよばれる巨大なゴミ捨て場である。彼は市の囑託としてゴミ処理を管理し、そのうえにスタジアムや公園をつくれるように埋めたてる仕事をひきうける。ところで彼は、日々ロアンヌが出す oms (*ordures ménagères*, 家庭ゴミ) の量、構成要素、oms にたいする市の対応について、専門家の眼で冷静かつ的確に腑わけし、それをもとにロアンヌの町がどういう町で、市民生活がどのようにいとなまれているかを分析している。この手法の根底には「社会は、その廃棄するものによって定義される」[204]⁸⁸⁾ という命題がある。アレクサンドルに賦与された視点はフォーコーもしくはアナール派歴史学の立場に近い。彼にとってゴミはティフォージュのいう「徴」であり、人間なるもののすべてなのだ。

あるとき市議会は、家庭ゴミの焼却処理の可能性について検討しはじめ、市内のクズ屋たちや「悪魔の穴」ではたらく人夫たちは騒然とする。アレクサンドルはゴミの存在そのものを隠蔽してしまおうとする焼却処理に強い反撥をおぼえる——「不意打ちだ。クズ屋商売の存在そのものを根絶やしにしようとい

う攻撃だ。物質的な攻撃にとどまらず、精神的な攻撃でもある。焼却工場 (usines d'incinération) の火は異端裁判所 (Inquisition) の火に通じるから。おれたちから見ればまちがいがなく、おれたちの体と心が規則にしばられないから、炎に投げこもうとたくらんでるんだ」[102-103]。焼却炉の猛火は、不当な異端審問、火刑台の火と同一視される。そして彼は第5章「天国と地獄」で、『神曲』にも似た冥界めぐりを体験することになる。まずヴァンセンヌの森で飼育係ベルナルをハントした帰り、彼は数人の警官と乱闘になり、留置場で一夜を過ごす。クーセク神父の助力で釈放されると、つづいてイシー＝レ＝ムリノーにある近代的なゴミ焼却工場を視察する。警察は煉獄だったが、焼却工場は地獄だった。彼が焼却工場に見たものは、個なるものを機械的に焼きほろぼす人工地獄の業火の、想像を絶する冷徹さである。彼はひどく傷つけられ、恐怖する。

個性も思い出もことばも、濃い色もうすい色も、趣味も嫌悪もみんな、oms といっしょに炎のなかにすべり落ちていく。微妙な感じとかニュアンスとか、存在のなかにある、まねようも置きかえようもないものがみんな、怒りにまかせて絶滅させられる。[...] 真相は、スクエアな連中が周縁の存在を灰と変ぜしめ無に帰せしめる、完全かつ決定的な勝利を、この地獄は具体的にしめしているってとこだ。火で oms を破壊して、異性愛社会は、統一化・一様化にむけて大きく一步を踏みだした。異なる、思いがけない、創造性を帯びたものをすべて排除する方向に。[120-121]

たしかにゴミは共同体内部の余剰、ケガレである。しかしそれを隠蔽しようとする共同体の衛生幻想は、あらゆる「ゆらぎ」を消去する全体主義へとつながってゆく。フランス語の *déchet* や *racaille* がモノにたいしてもちいられるときは「クズ」を意味しながら、人間にたいしてもちいられるときは「社会のクズ」を意味することをかんがえあわせれば、この不潔恐怖症がそのまま共同体の構成員の漂白へとつながることはあきらかだろう。アレクサンドルの肝を冷やすものがこれである。異形性を背負った構成員をしらみつぶしに発掘し、それに共同体内部のすべての負性を投射したうえで、スケープゴートとして外部へと駆逐して共同体の安定をはかるという手段は、古来からさかんにおこなわれていた⁸⁹⁾。焼却工場の火が喚起するのはアウシュヴィツのガス室でもある。アレクサンドルは焼却工場をおとずれるまえに、ヒトラーの同性愛者狩りを耳にするが、同性愛者を社会の無理解にさらされる一種のエリートとしてみる彼は、のちのユダヤ人虐殺を予言する。これこそが、「徴」を読むというこ

とである。

なんと不可思議な運命の暗合！ まさに oms の焼却が話題になっていたそのとき、不吉なウワサがドイツから伝わってきた。アドルフ・ヒトラーが考えてたことを実行する準備のさいちゅうだという。同性愛者が大量に逮捕され、法にふれることはなんにもしてないのに、強制収容所に閉じこめられて、ひどいあつかいをうけて死んでいくのだ。[…] いったん口火を切られたら、暴君はほかの少数派エリートを攻撃して、司祭、大学教授、作家、ユダヤ人、組合長、[…] みんな死体処理場送りだぞ、わからないのか？ [103]

ナチスの巧妙な宣伝戦略が政治パンフレットなどで国民の性生活の監視、逸脱の弾劾にむかったことは知られている⁹⁰⁾。ユダヤ人とジプシーは怪物としてほうむられるべきだとされ、バイシンメトリーの畸形者たちは子孫をつくる権利を剥奪され(Ⅲ-1 冒頭の引用を参照)、また「安楽死計画」によって、医学実験の材料にされるユダヤ人やごびともいた。たとえば収容されたものが真空死の実験台となり、フリートリヒ・メンゲレは双生児による対照実験(同時にクロロフォルムを注射されて死んだ双生児を同時に解剖する)に熱中した⁹¹⁾。こういった大虐殺はトゥルニエにあっては大きなモチーフのひとつである(たとえば『オーヌの王』『気象』におけるナチ、『マタイによる福音書』第2章第16—18節をもとにした『ガスパール』におけるヘロデ王によるベツレヘムの子どもたちの大量殺戮、『ジルとジャンヌ』のジル・ド・レによる幼児の供犠)。ナチスにかんしていえば、のちにアレクサンドルは占領下のひとけのないパリで、運命的な一瞬の出会いを体験することになる。エッフェル塔をバックに記念写真を撮っているドイツの軍人の一団を偶然見てしまうのだ。

だれだかすぐわかった。前面がおそろしくせりあがった平たい軍帽、鼻の下のちょび髭のせいでますますのっぺりして見える顔、なにより魚が死んだようななんにも見えない青緑の目、[…] 最大の異性愛者、ドイツ帝国総統アドルフ・ヘテロセクシャル、おれの同胞を毒牙にかけ、恐怖の収容所で非業の死をふりまいた茶色の悪魔。出会いは運命の必然だった。しかもほかならぬエッフェルペニスの影で。塵芥帝国からはせ参じた汚物王子と空飛ぶ納骨堂から舞いおりたベルヒテスガーデンの禿鷲は、一年でいちばん長い昼の太陽が輝かしいファンファーレとなって爆発する1940年6月23日日曜日視線を交わす宿命だったのだ。[294]

異物を排除し、のっぺりとした均質性をおしつける、ナチに代表される異性愛者の論理に、このように彼はつねにいらだちつつけるのである。

アレクサンドルはロアンヌで焼却場建設計画を頓挫させるために数日間のストライキを執行している（第7章）。回収業者のとつぜんの、いっせいの罷業に、ロアンヌの街なかにはゴミがあふれる。アレクサンドルは、ストの日々を「祝祭日」とよび、家という家のまえにつみかさなり道路にそびえるゴミの山々をrepositoir（臨時の聖体遷置所）とよび、そのおもわぬ美しさにおどろいてしまう。市民はそれらの「具象の彫刻」のあいだをこそこそと歩く。逆に通りをどうどうと占拠するのは、「悪魔の穴」への供給が急にストップしたため食物をもとめて街をおそうラットの大群である。聖なるものとしての不浄が秩序を顛倒させ、ゴミの王が短期間ではあるが都市を支配する。秩序の核へとマージナルな存在が急激に貫入しようとしてたちさわぐ、これはカーニヴァルである——「都市のクズ、のら犬、いっさいのはみ出しものを街の郊外、空き地やゴミ処理場に追いやる遠心運動、この動きがストのせいで息の根が止まり、逆流を起こした」[181]。そのケガレにたいする根深いおそれゆえに、道路清掃人が、マクロコスモスとのつながりを体現するものとして、被差別民となっていくた⁹²⁾事実をかながえれば、そのうえに君臨するアレクサンドルが地下の王、祝祭にさいしてはじめてその隠微な支配力を可視のものにする「愚者の王」となるのは容易に納得できよう。ナチスのやりかたとはまたちがった、不可視の倒錯した権力について、アレクサンドルは第2章で以下のように述べているのである。

都市の街路にひろがり、ゴミ処理場としていなかの土地も握っている、これはたしかに一大帝国だ。しかし同様に、個人個人のいちばん奥の秘密にももぐりこんでいたのだ。なにしろどんな行為や身ぶりも、吸い殻、破った手紙、野菜の皮、生理ナプキンとかのかたちで、その痕跡、反駁の余地なき証拠をゆだねてしまうのだ。つまり住民全体を頭から足まで手中におさめること、しかもそれを背後から、裏返し、逆転した、闇の世界のやりくちでやることになる。[30]

こうしてアレクサンドルは「排除される存在」を掌握することで都市の秩序を象徴的に左右する、文字どおりゴミの王となるのだ。

3. 挑発装置としての汚物

アレクサンドルの行為をとりあげてみると、彼が秩序にたいする挑発者である事実もさることながら、『気象』という書物じたいがそなえている挑発性があきらかになってくる。たしかにトゥルニエは、彼を狂言まわしにするこ

とで、排除される存在をかれの周囲に百科全書的（もしくは博物誌的に）配置し、小説『気象』をして一個の挑発装置とならしめているようだ。排除の諸相に、トゥルニエはこれみよがしともいえるやりくちでつぎつぎに光をあて、読者の意識にさらすという戦略をとってみせる。これら排除される存在は、非秩序（ノモス以前）をアイデアとするもので、分節言語ではアプローチ不可能な「カオス」の、影ともいうべきものであろう。あえて「存在」の語をつかったのは、本稿の冒頭にも書いたように、それが人間のみならずさまざまな事象にその外延を拡大しているからである——たとえば排除される場としての見世ものの小屋、ゴミ処理場、排除される動物としての寄生虫、ゴミのなかにうごめくラットの大群、街なかで交尾におよぶ野犬など。排除される人間についての考察はニコル・ギシャールらが詳細に論じるところである⁹³⁾が、本稿の目的とするところではない。ここでは異形との関連から、身体性における排除について論じたい。トゥルニエの挑発戦略としてのスカトロロジーについては目下、デイヴィッド・G・ベヴァンが2ページあまりを割いたもの⁹⁴⁾があるとはいえ、まとまった論考は少なく、今後の研究が待たれる箇所である。本稿ではいくつかの例を挙げるにとどめざるをえないが、身体論の一変種として、「気象」におけるスカトロロジー——正確には、「浄」の場、ふさわしくない場面につきつけられた糞尿学的イメージが喚起するラプレー／スウィフト的な笑い——が読者の意識にたいする挑発の機能をそなえているということを確認しておきたい。したがって『気象』に見られるのは、スカトロロジー一般というよりもっと前性的なものであり、地口や自由連想を起爆剤にした幼児的な肛門フェティシズムによる「不謹慎な」笑いの喚起、と定義すべきだろう（II-2に引用した「象の鼻をもつゴミ収集車」の幼児的なイメージをおもいだしてみてもよい）。

まず、アレクサンドルがギュスターヴから継承した「都市家庭塵芥収集会社」の略称についてである。ブルーミエも指摘しているように、SEDOMU (*Société d'enlèvement des ordures ménagères urbaines*)の字ならばはSODOME (ソドム)をおもいおこさせずにはおかない⁹⁵⁾。アレクサンドルはソドムの王として都市の裏面に君臨するのだ。それから、アレクサンドルが「都市家庭塵芥収集会社」の事業をうけつぐ契機となったのが、死んだ兄ギュスターヴの部屋で見かけたパンフレットの題であろう。

LA SEDOMU ET SON ŒUVRE DE RÉPURGATION

Répurgation は造語である（邦訳では「下浄」）。動詞 purger はほんらい「清める」の意があり、そこから purgatoire（煉獄）の語が派生するいっぽう、原義から発展した「下剤をかける」の意味では purgation（下剤，通痢）が派生する。そこで purgatif には「悔悛の」と「下剤の」の意味がでてくる。Répurgation の語が神学とスカトロロジーをダブルイメージにしてしまうのだ。

下浄！ 胃腸科の処方箋か応用倫理神学の研究書から逃げだしてきたことばって感じじゃないか。ギュスターヴのすべてはこの造語にあった。辞書をひいてもむだだ。この語を見ると、兄が、じぶんの職業のおぞましさを、腸内精神的学術研究（recherches intestino-spirituelles）のふんいきで埋めあわせようとして、過剰補償になってしまっている、その努力のさまがひしひしとつたわってくる。だがこの夜おれは、なんてことを知ってしまったんだ！ 1934年9月26日から27日にかけての夜に比較できるのは、大パスカルの決定的回心の夜しかあるまい。[29]

アレクサンドルと「都市家庭塵芥収集会社」とのかかわりを語るこの章の題が《La sacre d' Alexandre》であるのもうなずけよう。「聖別式」という、司教もしくは王にたいしてつかわれる語（邦訳では「聖職就任」）の使用で、彼が汚物世界でさかしまの王となることがなによりも明瞭になる。

アナルフエティシズムの復権は神学的領域のみならず、文明論の領域でもはたされる——「イスラム肛門文明。アラブ人は脱糞のさい、紙じゃなくて、古い空き罐に水をちょっと持っていく。[…]「口承」文明は「活字」文明に優越する。ケツにまで紙をつっこむなんて、ヨーロッパは紙クズによっぽど夢中なんだな」[321]。アレクサンドルは、共同体内部のユダヤ人の虐殺へとつながる近代西欧文明の衛生幻想・不潔恐怖症を相対化してみせるのだ。硬直した精神にあたえるショックのもっとも根源的なものが排泄物であることはしばしば指摘されるところである。排泄物が忌避の対象となるのは悪臭ゆえではない。もともとそれが嫌悪の対象となっていなかったら、悪臭をはなってはいなかったのではないだろうか⁹⁶。それは人間の部分的な死体であり、いわば固体・液体・気体化した死そのものであるがゆえに忌避されるのだ。また排泄物は、人間の体内から直接出てくる。つまり人間にとって手に触れることができる最初の他者＝じぶんの身体を知るための手がかりになるのだ。子どもがしばしば排泄物への興味をあらわにするのも、罵倒語（原始心性を直接的につたえる語である）に、たとえば“Kiss your mother's behind!” “Lick my ass!”（ケツくらえ）式のものが世界各国にみられるのも、排泄物や排泄器官が身体論の

出発点だからではないだろうか。したがって、硬直した精神に汚穢が投げつけられるとき、それが実体をもった汚物だろうと「フォーレターワーズ」だろうと、それは一種の聖別とならざるをえないだろう——「どうも便秘がちだ。毎朝異性愛者の顔にクソを垂れていいよって言われらなおるかもな。異性愛者への糞情の吐露、か (Conchier un hétérosexuel.)。でもこれもそいつには過ぎた名誉ってもんじゃないか。やつらの卑しさにくらべたらおれのクソは純金じゃないか」[122]。『気象』ではアレクサンドルの語りは浄なるもの、きまじめなものに、どこまでも泥を塗りつづける。けれどもその作業は倦まずたゆまず喜々としてなされるのだ。アレクサンドルの手つきにトゥルニエが賦与したのは、泥あそびをしたばかりの手で周囲のものによごれを塗りたくる「子ども」というイメージではないだろうか。こういったアレクサンドルの道化性が、幼児的な「愚者の知恵」と直結することは言を俟たない。たとえば警察でとりしらべをうける場面——「がっかりだ。身体検査で、パンツをおろされて前かがみになって、看守のやつにケツの穴あくびみたいにひろげて見せたりとかはしないんだな。てっきりやらされるとおもったから、けっこうたのしみにして、しっかり腐った尻を1時間以上まえから溜めといたのに。そのときになったらヴァイオリンの音色で一発むだ口かましてやるどころだったんだがな」[115]。トゥルニエは愛嬌すらある不謹慎さの喚起によって、アレクサンドルをティル・オイレンシュピーゲルのような民話のヒーローに近づけたものであろう。クーセクによって腐敗をあばかれる警察機構が代表する、硬直した精神は、『気象』ではかならずといってよいほどスキャンダラスな汚穢をつきつけられる運命にあるのだ。

さいごに、ロアンヌの社交界がアレクサンドルの目のまえで汚穢と遭遇してしまう、ファビエンヌの婚約披露パーティの場面をみておきたい。名家の末裔で、レズビアンでサディスト気味のファビエンヌは、しばらく病床に臥していたが、回復したとみえて、盛大な婚約披露宴をひらく。土地の名士たちにまじってアレクサンドルもサン＝アオン城に招待される。彼は新郎アレクシス・ド・バスティ＝デュルフェを、名前といい容貌といい、オノレ・デュルフェの『アストレ』に出てくるセラドン（普通名詞では「こっけいなほど恋にやつれた青年」）を想起させる「女ども向けのオカマ野郎——サイテーだ！」[221]と評する。やがてホールでははなやかな舞踏会が準備され、客たちの称賛の視線をあびた新婦は新郎のまえに立ち、オーケストラのヴァイオリニストたちがいっせいに弓をかまえる。緊張した一瞬の沈黙と静止につづいて——

ずるん、と湿った音がすると、なにかファビエンヌのパンプスに転がり落ちて、はめ木のつやつやした床のうえにつぶれた。ぱっと見平べったくて白っぽいパスタがたばになった感じだが、生きている。息づいている。ゆっくり蠕動運動をしている。リボンがもつれあったようで環節がある、これはゴミ収集人によくある *taenia solium* [有鉤条虫] だな、とすぐにぴんときた。[...] 5, 6メートルはあろうかというねばっこいひもがずるずるのたくって、砂にあがった蛸みたいになったやつを、ほろほろ鳥ども〔招待客〕はみんな釘づけで見まもっている。[224]

硬直した招待客のなか、ゴミ収集人としての使命感にかられた彼は、なにも見えていずあいかわらず菓子をはおぼっていると成りの老婦人の手から皿と小さなスプーンをうばい、どうにかこうにかサナダムシをスプーンで皿にのせると、茫然と彼をみつめつづけている新郎の手にその皿とスプーンをのせる。「誓って言うがおれは「食え！」とまでは言わなかった。腹のなかでしか。見ろ、それは現実になった!」[225]。アレクサンドルが「ミュージック!」と号令をかけると、ヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」などウィンナ・ワルツをオーケストラは演奏しはじめ、ひとりひとりひっそりと退出してゆく招待客たちをしりめに、アレクサンドルとファビエンヌは全曲をおどりとおす。

家庭ゴミのアマゾンと塵芥のダンディ、セックスはクロークに置きっぱなしで舞踏会をリードする。「マドモワゼル・ファビエンヌ、リボヴィエ伯夫人、ぼくたちはなんてふしぎなカップルなのでしょう! ぼくを夫にどうです? 新婚旅行はやっぱりヴェネツィアなんてのは? ゴミ収集人が大きなゴンドラの船頭をして、毎朝ラゲーナの浅瀬にヴェネツィアの oms を棄てにいくものですから、そこには新しい島が生まれようとしているんだそうですよ。そこにぼくたちの宮殿を建てるなんていかがです?」[225]

こうして顛倒したパーティから、ロアンヌの社交界の異性愛者たちははじき出され、ふたりの同性愛者だけがホールに君臨する。それは焼却場建設反対のストライキとおなじく、この世ならぬものとして排除されたソドムの王が一時的に支配する、価値顛倒のカーニヴァルにほかならない。秩序をおびやかす相対化するこの祝祭性こそ、アレクサンドルに賦与された機能なのである。ここでみてきたように、『気象』における挑発装置としての幼児的アナルフェティシズム、スカトロジー、汚物嗜好の機能は、もっと注目されてよいだろう。

4. 内なる「異形」へ

作品の発表年代と作者のなかでの主題の取捨選択の移行がもちろん、かならずしも発表順に対応するわけではない。とはいえ、これまでみてきたことからあきらかなように、『オーヌの王』と『気象』、そして『気象』と『ガスパール』は、それぞれ部分的にかさなりあう主題をもっている。トゥルニエは『オーヌの王』でとりかかった異形の探求を『気象』で発展させた。そしてそのさい、原初の楽園喪失の主題が再浮上し（再浮上、というのはこのテーマは『フライデイ』にもうかがうことができるから）、またヤハウエがアダムを創造したときの「形」と「類似」の問題が『ガスパール』に結実した。こうしてトゥルニエの長篇の1970年代いっばいの軌跡を、「異形」のモチーフを軸に分析することが可能である。

さてトゥルニエ作品では、共同体の規範からのさまざまなレベルでの逸脱が、多くの主要登場人物のうえに強調されている⁹⁷⁾。

- i) 定住民に対する「漂泊民」「移住者」——『黄金のしずく』の主人公ドリース、「アダム一家」のアベル、その他。
- ii) 秩序内の住民に対する「マージナル・マン」——『ガスパール』で、肖像を愛好して偶像忌避の宗教的タブーに触れるバルタザールのような異端者、『黄金のしずく』に登場するシネアストであり少年愛好家であるムッシュー・マージュや『大雷鳥』所収のモノローグドラマ「フェティシスト」の下着愛好家などの性倒錯者＝「前性的」な人間、「赤いこびと」の矮人リュシアン・ガニュロンのような畸形、その他。
- iii) 「内部の人」に対する「外部からの帰還者」——「ロビンソン・クルーソーの最期」のロビンソン⁹⁸⁾、そしておそらく『ガスパール』の、帰国後の東方の三博士（ほのめかされるだけで描かれていないが）、その他。
- iv) 文明人に対する「バルバロス」——『フライデイ』の未開人フライデイ、「親指小僧の家出」における森の大男ローグル⁹⁹⁾、『ガスパール』の、黒人国における金髪のコルボレイア人ガレカとビルティース、その他。

もちろんこの分類と登場人物の属性はかならずしも一対一に対応しているわけではなく、重要な人物は複数の属性を背負っていることが多い。たとえば『オーヌの王』の主人公のばあい、身体は怪物に近い巨漢であり精神は性的に

倒錯しているというように。いずれにせよ、とくに重要な人物であれば、それらの属性はかれらに「刻印」されており、あらかじめあたえられた属性というよりもむしろ運命と呼ぶにふさわしいものとなる。『気象』の主人公ポールは8歳のとき、偶然にティフォージュに出会い（II-1参照）、のちにその印象を回想してこう語る。

いやな感じにおそわれた。なんとなくこわくもなった。その人が巨大な力を持たされてるみたいだから。肉体の力だけじゃない。精神の力なんかとはぜんぜんちがう。そんなじゃない！ ある力が体に宿ってる。その力を託されて、その力のいうがままになってるような、でもその力はその人のものじゃない。運命というやつじゃなかったらうか。そう、あの人には宿命の引力みたいなものがあった。[161]

ジャン＝ベルナル・ヴレは「運命」をトゥルニエ作品をつらぬく重要な観念であるとして怪物・倒錯者とのつながりを指摘した¹⁰⁰⁾。リン・ソーキン・スピロリになってその運命の転変に通過儀礼の諸相を詳細に分析することも可能だろう¹⁰¹⁾。そしてその運命は、本稿でみてきたように「逸脱」として目に見えるかたちで読者の目にさらされるのである。

本稿は、前述ii)のマージナル・マンと分類したものたちのうち、怪物的な人物・事象・表象をめぐって考察した。トゥルニエ作品にはこのような怪物のほかにも、さまざまな異人（外国人をふくむ）が登場し、共同体がかれらにむけた奇異のまなざしをかれらが分析することによって、逆に共同体が照射されることになっているのだ¹⁰²⁾。ここで、『気象』にあらわれるさまざまな異形論をふたたびおもしろくおこしてみよう。ラルエ、ベアトリス、ゴータマ、ポール、ジャン、アレクサンドル——いずれも異形（畸形、双生児）や逸脱（同性愛）がいかにか「正常」から峻別されるかを述べながら、さいごにはひとまわりして全人類の起源という、ことばにすればいささか陳腐ともおもえる大問題に溺れてしまう。異形の特異性、特権性から出発しながら、その論を極限にまでおしすすめることで、「正常」と「異形」との境界線をかえて無化してしまうところまでいかなければ、かれらの言説が止まらないということを、本稿でわれわれはあまりにしばしば目にしてきた。彼らの語りは、たしかに内容的には異形がいかにか「正常」とちがうかをのべている。しかし発話レヴェルでは、矛盾や多義性（あいまいさ）にあまりにしばしばつきあたる彼らの言説は（神話や夢の文法を思いうかべることができようか）、「異形」と「正常」を分離する論理に忠実なあまり、二分法の限界をけっきょく故意にきわだたせてしまうパ

フォーモンスとして解釈できるのだ。かれらの語りによって異形は現存する全人類の祖先にまでまつりあげられてしまったのではないか。「正常」と「異形」の差異がさだかでなくなってしまうのなら、それでは異形はどこにいるのか。さいごにもういちど『オーヌの王』での、ティフォージュの怪物論をおもいおこしてみよう。そのなかで彼は畸形（怪物）のなかに、驟馬やけっぺいのように生殖能力を欠いたキメラをふくめているが、このことは注目にあたいするだろう。実在するキメラの例としてたとえば「ポマト」（じゃがいも＋トマト）や「レオポン」（豹＋ライオン）があげられるように、つねにキメラは現存する諸要素の合成によって成立するのであり、空想上の生物がどんなに非現実的な総体をもとうとも、その部分に実在しない部分はない¹⁰³⁾。「正常」と「異形」の差異はひっきり、なんらかの過剰ないし欠如へと帰結するものである。怪物に構造分析をほどこしてしまえば、巨人（量的過剰）かこびと（量的欠如）、アルゴス（数的過剰）かキュクロプス（数的欠如）、ケンタウロス（合成）か空飛ぶ人頭（削除）という2極に収斂せざるをえない。キメラの語源 *χημαίρα* はほんらい牝ヤギの意味だが、むろん一般にキマイラといえはホメロスが『イリアス』第6書でグラウコスに語りしめているように「前方は獅子、後ろは大蛇、まん中は牝山羊のかたちをなし、／燃えさかる火の勢いを、もの凄いまに口から吐いて出しているもの」¹⁰⁴⁾である。フランス語 *chimère* に「妄想」の（ときとして軽蔑的な）意味があることをかんがえあわせれば、「怪物」の要素はつねに、①有限で②既知のものに還元されるのも自然な帰結であろう。いってみれば『気象』における異形とは、人間精神内部の混沌からうまれた、不定形の「名前がないものたち」[53]にほかならないのである。

註

- 1) Michel TOURNIER, *Les Météores*, Paris: Gallimard, 1975. この作品からのものにかぎって、本文中の引用のあとの〔 〕内にページを示した。訳は拙訳によるが、一部の病理学用語などについては、邦訳『メテオール（気象）』（榎原晃三十南條郁子訳、国書刊行会、1991年）を参照した。
- 2) 「異質なるものと遭遇したときの対応の形式によって、あらゆる社会を＜異物吸収型＞と＜異物嘔吐型＞とに分類することが許されるかもしれない。たとえば、精神病者の処遇を例とすれば、かれらを共同体の内側から排斥せずに、常人から分かれた聖なるものとして包摂している社会（吸収型）と、かれらとの接触を忌み怖れるがゆえに共同体から疎外し、収容施設に隔離しておくことをえらぶ社会（嘔吐

- 型) とに分類される。／概して西欧社会は嘔吐型に属する」(赤坂憲雄『新編 排除の現象学』, 筑摩書房, 1991年, 154頁)。
- 3) 奇蹟やそのほか近代科学では説明できない現象は、ヨーロッパ文学研究の場ではふつう「超自然 (surnaturel)」という語をあてられるが、トゥルニエの作品にあってそれは、自然 (nature) の、つねひごろは隠蔽されている本性 (nature) の顕現、というニュアンスをもつ。したがってここでは「超常」の語をもちいた。
 - 4) 「ジャンルとしての幻想文学におちいってしまうことは、わたしにとっていつも問題外だった。精密さや合理主義を極度にすすめたハイパーリアリズム、過度の合理主義によってのみ幻想的なものにつながってくるような、そういうリアリズムを墨守したいとおもう」(TOURNIER, *Le Vent Paraclet*, Paris: Gallimard, 1977, p. 111.)。自伝的エッセイ『精霊の風』での発言である。このようにトゥルニエの方法には、ジャンルとしての幻想文学とのあいだに距離をとろうとする姿勢をみとめることができる。フランス文学において、ノディエの「文学における幻想的なものについて」(1830年)にはじまった幻想文学の定義は、今世紀にはブルトン、カイヨワをへて、シュネデール、カステックス、ヴァックス、ロワ、トドロフにいたるまで、さまざまなかたちでおこなわれてきたが、おおむね厳密さと明晰さをもとめるあまり、幻想文学をかながえるうえで重要な作品多数に「幻想文学ではない」という烙印を押してしまい、論者たちの意に反して、幻想文学をジャンルとして定義することの不可能性の証明となってしまっている感がある。本稿では由良君美がいう「経験的分類」にしたがって「広義・幻想文学」の立場からトゥルニエ作品を幻想文学に包摂したいとかがえる。
 - 5) 聖ブリジット学園という静謐な地獄のほかに、第5章「天国と地獄」にはアレクサンドル叔父がゴミ焼却工場を凄絶な焦熱地獄として体験する場面がある(本稿Ⅲを参照)。地獄への降下と地上への帰還が神話的な死と再生の意味あいを帯びて登場するこの題材は、『気象』につづく長篇『ガスパール、メルキオール、バルタザール』最終章でマンガロール王子タオールが体験する塩鉱での33年間の強制労働の場面へとうけつがれてゆくことになる。詳細は、拙論「トゥルニエの神話的次元——『ガスパール、メルキオール、バルタザール』を読む」(『STELLA』第9号所収、九州大学フランス語フランス文学研究会, 1991年) 101-102頁参照。
 - 6) アナール学派の歴史学においても、同様の指摘がなされている。
 - 7) イーニッド・ウェルズフォードは『道化——その社会史と文学史』第2部第3章で、宮廷愚者の起源のいっぽうを贖罪のヤギ(スケープゴート)にもとめ、つづく第4章では象徴的な真実を透視するもの(幻視者というふう)に解釈してよいだろう)を指定して、古代ギリシアの神託などシャーマニズムから出発してケルト文学などに例をとりつつ、「狂人は霊すなわち彼の外の力の代弁者になってしまったので、隠された知識——特に未来についての知識——に近づくことができるので、その理性が普通の働きをしなくなった、畏敬の念を起こす人なのだという広く行き渡った観念」(『道化』, 内藤健二訳, 晶文社, 1979年, 79頁)を紹介している(1-2参照)。愚者は、日常を超えるもの(ばあいによって欠如であったり過剰であったりする)を帯びて共同体の外部へと祀り捨てられる存在である。
 - 8) 『西洋思想大辞典』, 平凡社, 1990年, 「愚者の知恵」の項を参照。
 - 9) こうしたおそるべき存在の例として、エウリピデスの「フェニキアの女たち」に登場するギリシア神話中の盲目の予言者テイレシアスがいる。彼は見てはいけないも

のを見てしまったため（たとえば女神アテナの裸身など諸説ある。あるいは口に出してはならない真理を口走ったためともいう）神罰で盲目になったが、その代償に予言能力を獲得した。アポロドロス『ギリシア神話』、高津春繁訳、岩波文庫、1953年、135-136頁、およびカール・ケレーニー『ギリシアの神話——英雄の時代』、植田兼義訳、中公文庫、1985年、108-110頁参照。プラトンの『国家』第7巻第1章514A-521Bで語られている有名な「洞窟の譬喩」において、イデアは直射日光のようなもので人間には直視できないものだといわれていることがおもいだされる。これは神聖な真理や秘義を知った人間は気がふれてしまう、というモチーフのヴァリエーションである。絶対的な「外部」と錯乱との密接な関係を解くその発想は神秘思想やバタイユ、ラカンにも発見されよう。『気象』ではシスター・ベアトリスの眼にうつる重度の障害児すべてがこの「愚者の知恵」を帯び、のちにはまたポールじしんもじぶんの半身とひきかえにその力を帯びることになる。物理的に移動不可能でありつつ偏在する能力は、『古事記』上つ巻に登場するクエビコ（かかし）をおもわせる——「山田の曾富騰（ソホド）といふものなり。この神は、足は行（アル）かねども、天の下の事を盡（コトゴト）に知れる神なり」。I-2およびIIを参照。

- 10) この部分はとうぜん、女性にたいしてある種否定的なポールの思想が読みとれる箇所のひとつだが、この問題については本稿ではふれる余地がない。ところでこの部分はポールによって語られている。『気象』には3人称で語られる部分と、登場人物のどれかによって1人称で語られる部分とがあり、語り手としてはポールとアレクサンドルが多くを占めているが、ジャンもときおり登場し、ソフィ、ハミダ、「上人」も語りの一部になっている。こういった語りの多声構造は3人称とロビンソンの「航海日誌」が交錯する『フライデイ』、3人称とティフォーージュの「不吉な手記」が交錯する『オーヌの王』でもこころみられているが、ことなつた人物たちによる1人称を輻輳させたのは『気象』がはじめてであり、この手法は『ガスパール』でより徹底してもちいられることになる。Voir Serge KOSTER, «Éléments de Tourniéologie: en suivant Gaspard, Melchior et Balthazar» in Michel Tournier, Paris: Henri Veyrier, 1986, p.23; et aussi François STIRN, *Vendredi ou les Limbes du Pacifique/Tournier*, Paris: Hatier, coll. «Profil Littérature» n° 86, 1983, pp. 48-49.
- 11) 心理学者オリヴァー・ザックスのレポートをもとに、同様の能力の実例をコリン・ウィルソンが紹介している。おどろくべき偶然だがその自閉症、精神異常、知恵おくれの精神障害者マイケルとジョンはほとんど区別がつかない双生児である。「紀元前五五年六月十一日とたずねると、二人は即座に「水曜日」と答える。調べてみると合っている。[...] 二人は、どんな桁の数でも一回聞くと繰り返して言うことができる。三百桁でもだ。ただし、暗算の超人ではない。[...] だれかがマッチ箱を床に落とす。二人は箱が床にとどく前に「百十一」とつぶやく。中身の本数をかぞえと、これも合っている。[...] 二人が部屋の隅で満足したような気味悪い笑みを浮かべながら、六桁の数字を紙に書いて興じている [...]。それはすべて素数だった。[...] 任意の数が素数かどうか確かめる数学的な方法はない。その数の半分より小さい奇数で割って余りがでることを確かめる。次はそれよりさらに小さい奇数で割って余りがでることを確かめる。これを辛抱強く繰り返す以外に手はない。しかし、この双子は明らかになんの苦勞もなしに空中から素数をつかみ出した」(コ

リン・ウィルスン+ダモン・ウィルスン『世界不思議百科』、関口篤訳、青土社、1989年、581-582頁)。このふたごは素数とおぼしき20ケタの数まで交換している。その力はフランツをおもわせるが、いっぽうの名がジョンであることや閉じたサイクルをつくってふたりだけの交換をおこなっているすがたはむしろジャン＝ポールをおもわせるものがある。『世界不思議百科』は1987年刊行、このふたごの記述のもととなったレポートはその2年前の発表であり、この記録そのものと1975年刊行の『気象』のあいだには直接の因果関係はない。しかし『気象』以前に類似の症例が報告されていた可能性はじゅうぶんにある。ちなみにコリン・ウィルスンはマイケルとジョンの例については右脳の発達に関係があるのではないかという見解をよせている。左右の相違の問題は、本稿Ⅱでみる「2分割」のテーマに深く関連してくる題材だといえるだろう。

- 12) Voir Arlette BOULOUMIÉ, «Questions à Michel Tournier» in *Michel Tournier. Le Roman mythologique*, Paris: José Corti, 1988, p. 256.
- 13) スペイン在住のチリ人小説家ホセ・ドノソ (1924-) の長篇『夜のみだらな鳥』(1970年) の設定には、畸形児をめぐる同心円について『気象』に符合する点がみられる。名門の当主ドン・ヘロニモ・デ・アスコイティアが待望していたあと息子≪ボーイ≫は、人間であることすら疑われるほどの畸形児としてこの世に生をうける。父はこの事実を秘匿し、秘書で小説家のウンベルト・ベニャローサ (ときとしてこの小説の語り手となる) に養育をまかせ、国じゅうから集められるかぎりの畸形者をかき集めて、≪ボーイ≫がその中心に位置する広大な敷地に同心円状に、それぞれの畸形の度合いにおうじてつけられた等級 (1級, 2級, 3級…) にしたがって住みわけさせる。「[...] 自分たちの役目をよく心得た不具を≪ボーイ≫の周囲に配するだけでは、実は十分ではなかったのだ。これら一級の不具の周囲に、その面倒をみる二級の不具たちを配する必要があった。パン職人、搾乳係、大工、ブリキ職人、菜園係、雑役……要するにあらゆる仕事に従事する者たちで、彼らがいればじめて、正常者の世界は遠くへ押しつけられ、ついには消滅してしまうのだ」(ホセ・ドノソ『夜のみだらな鳥』、鼓直訳、集英社、1984年、188頁)。ここで構築されるのは正常者たちが住む外部を隠蔽する無時間的な反ユートピアであり、そこに住むただひとりの正常者ウンベルトはその「グロテスクな地獄曼荼羅」(四方田犬彦「夜のみだらな鳥」、由良君美監修『世界のオカルト文学 幻想文学 総解説』所収、自由国民社、1985年、303頁) にあっては「畸形者」の役割を背負うことになる。ここでは、同世代の小説家によって5年早く発表された、「ヒエロニムス・ボスの地獄図に似て、世界を混沌へと、無秩序へと戻す意志によって [...] 全体が貫かれている」(同上) の小説が、設定のほかにも、身体論への意識、スキャンダラスな細部の肥大、そしてなによりも分身 (double, うつし) モチーフの重視、といった要素を『気象』と共有していることを指摘しておく。
- 14) 「λογος I. 心のなかのかがえを表現するのにつかうことば。II. 心のなかのかがえ、もしくは理性本体」(*A Lexicon Abridged from Lidell and Scott's Greek-English Lexicon*, Oxford: Clarendon Press, 1982, p. 416)。このように、ロゴスは「ことば」と「理性」をとうぜんのように不可分のものとしている。
- 15) Voir TOURNIER, *Le Vent Paraclet*, op. cit., pp. 183-183; et aussi BOULOUMIÉ, op. cit., pp. 24.
- 16) 「始めに、言葉はおられた。言葉は神とともにおられた。言葉は神であった。この

- 方は始めに神とともにおられた。一切のものはこの方によって出来た。出来たものでこの方によらず出来たものは、ただの一つもない」(塚本虎二訳「ヨハネ福音書」第1章第1-4節、『新約聖書 福音書』所収、岩波文庫、1963年、275頁)。またマリナ・ヤグェーロ『言語の夢想者——17世紀普遍言語から現代SFまで』、谷川多佳子+江口修訳、工作舎、1990年、28-41頁および86-106頁参照。
- 17) TOURNIER, *Gaspard, Melchior & Balthazar*, Paris: Gallimard, 1980, p.191.
 - 18) Voir Colin DAVIS, *Michel Tournier. Philosophy and Fiction*, Oxford: Clarendon Press, «Oxford Modern Languages and Litterature Monographs», 1988, pp.173-179.
 - 19) プロトジェネシスが成熟促進(時間的に祖先より早くなった生殖)による幼形進化であるのたいして、ネオテニーは身体の特定部分の発育のおくれ(ヒトの成体とチンパンジーの胎児の酷似など、「幼若形質」がたもたれること)による幼形進化のことである(スティヴン・J・グールド『個体発生と系統発生——なぜ、われわれは「幼な顔」=ネオテニー=が気になるのか?』、仁木帝都+渡辺政隆訳、工作舎、1987年、参照)。またヤグェーロ前掲書、145-187頁参照。
 - 20) 「言語習得という側面からみれば、子供は言語の原型を遺伝的に持っているというより、文法習得の可能性を持っているといったほうが適切であろう。そして、この可能性が遺伝的に決定されているのである。遺伝的に決定された可能性は、言語習得の過程で経験的な言語状況に応じて、そしてその刺激が時間的、空間的にどのように与えられるかに応じて、結果が異なってくる。このように述べると、遺伝子の時間的な調節が有効に働いているネオテニーと著しい類似性をもってくる」(西脇与作「ネオテニー 成長と進化」、市川浩他編集<現代哲学の冒険>2『子ども』所収、岩波書店、1991年、121頁)。
 - 21) 本来 mongolien (ne) は「モンゴルの」という形容詞であり、「モンゴル人、モンゴル語」を意味する名詞は mongol (e) (「モンゴルの」という形容詞でもある)。いっぽう、名詞の mongolien (ne) は「ダウン症患者」の意。ダウン症は先天性痴呆の一種で、患者は「額が広く、眼尻が上がり、鼻根が扁平で独特の顔付である」(新村出編『広辞苑』第2版補訂版、岩波書店、1976年)とところがヨーロッパ人がみたモンゴロイドをおもわせるところから、別称を蒙古(人)症(mongolisme)という。
 - 22) Voir BOULOUMIÉ, «*Vendredi ou les Limbes du Pacifique*» de Michel Tournier, Paris: Gallimard, coll. «Foliothèque», 1991, pp.60-62 et *passim*.
 - 23) ルドルフ・オットーは、聖性のうちの非合理的で多義的な「過剰」にヌミノーズという名をあたえ、『聖なるもの』第2-9章で分析している。ヌミノーズの諸要素のうち、「戦慄すべき」「秘義」(理解不能な絶対他者)「魅するもの」「巨怪なるもの」(見知らぬ他者としての「驚異」)といった要素を、シスター・ベアトリスから見た障害児たちが満たしているのはたしかである。
 - 24) マンリー・P・ホール<象徴哲学大系>3『カバラーと薔薇十字団』、大沼忠弘+山田耕士+吉村正和訳、人文書院、1981年、88頁参照。
 - 25) Voir Françoise MERLLIÉ, *Michel Tournier*, Paris: Pierre Belfond, 1988, pp.35-43.
 - 26) レスリー・フィードラーによれば、畸形児たちの誕生にたいするキリスト教サイドの説明のひとつとして、子どもの誕生がつねに天地創造と同様に奇蹟であると人間

におもいおこさせるための自然の摂理なのだとすることがあったという。レスリー・フィードラー『フリークス——秘められた自己の神話とイメージ』伊藤俊治＋旦敬介＋大場正明訳、青土社、1986年、278-279頁参照。

- 27) 異形への性的欲望をもっとも直截にえがいたトゥルニエ作品が、『大雷鳥』所収の短篇「赤いこびと」である。ここでは「小男」の弁護士リュシアン・ガニュロンが、シークレットブーツをぬいで「こびと」となることによって強烈なセックスアピールを身につける。小男はたんなる身長不足だが、こびとは超人なのだ。かれはみずからウルビノ・サーカス団に身を投じ、そこにじぶんのいるべき場所を見いだす。この作品はおそらくマルセル・エーメの短篇集『こびと』の表題作の着想を逆にしたものだろう。エーメの「こびと」では、バルナブーム・サーカス団のスターであるこびとが35歳にして身長を伸ばしはじめ、人なみの背丈をもつ美青年ヴァランタン・デュラントンになったあげく、アイデンティティをなくして観客たちのなかに「消え」てしまう。このサーカス団の団長の名前が、サーカスに大々的なフリークショウを導入して19世紀後半に世界を席卷したアメリカの興行師フィニアス・T・パーナム(1810-91)からきていることはまずまちがいない。
- 28) 「私は、自分がきわめてユダヤ・キリスト教的な考えを持っていると思っています。私はそこに糧や靈感の源泉を見出す。が、同時にそれによって否応なく生じる限界に苦しんでもおります」(ミシェル・トゥルニエ×大江健三郎〔対談〕「文学的創造を問う」、『群像』1992年1月号、213-214頁)。
- 29) 『精霊の風』によれば、トゥルニエは文学のシュルレアリスムよりも絵画のシュルレアリスムにみずからの幻想の範をとっている。聖書にたいして過激なファンダメンタリストであるトゥルニエは、「シュルレアリスム」の語にたいしても字義どおりの解釈をする。過度のリアリズムをもって幻想をみちびきいれようとするのだ。マグリットやダリが、フォーヴィスムやキュビズム、印象派を一掃して細密画の伝統に学んだことを指摘しつつ、彼は、ブルトン派も後期ロマン派、象徴派と袂をわかち、ゴッティエ、フローベール、モーパッサンにつながる「幻覚にいたるほどの客観主義」をめざすべきだったとのべている。Voir TOURNIER, *Le Vent Paraclet*, op. cit., pp. 111-113. いっぽう、ほんらい真偽とりまぜた「怪物誌」から派生した博物学とその図譜(博物画)はその出自ゆえにつねに未知への驚異と幻想にささえられているが(荒俣宏『図鑑の博物誌』、リプロポート、1984年、82-88頁参照)、とりわけ19世紀に発達した印刷技術を駆使した極彩色の精緻な博物画は、トゥルニエが重視するメチエ(熟練芸)を体現している、多くは名前すら判別しない専門職的細密画家の手になるもので、画面のうへのすべての点という点に焦点があたっているパラノイア的細密描写がシュルレアリスム絵画とおなじように眩惑をさそう幻想性を背負っている。ちなみにシュルレアリストが手本にしたとトゥルニエが名ざしする細密描写の画家たちの名前は、ガリマル社版とフォリオ版(TOURNIER, *Le Vent Paraclet*, Paris: Gallimard, coll. «Folio», 1980)では若干の異同がある。
- 30) 本稿では *monstre* を、文脈におうじて「異形」「畸形(性)」「怪物」と訳しわける。
- 31) TOURNIER, *Le Roi des Aulnes*, Paris: Gallimard, 1970, pp. 11-12.
- 32) 田中秀央編『増訂新版 羅和辞典』(研究社、1952年/1966年)による。
- 33) 原文ではここに脚注で«Cf. le roman *Le Roi des Aulnes*.»とある。

- 34) むろんティフォージュのことであるが、『気象』では、ティフォージュはいちど登場するにすぎず、ふたごも彼を「自動車修理工場の男」として見るにすぎないので、『気象』の文脈に添うばあいには原則として「(修理工場の)男」とする。
- 35) ジョヴァンニ・バッティスタとジャコモのトッチ兄弟は第6肋骨から下が完全に融合していたので、脚が2本、肛門も性器もひとつしかない双頭人間として短期間サイドショーのスターだった。マーク・トウェインは彼らのポスターにヒントをえて小説のモデルとしたが、その小説はイタロ・カルヴィーノの『まっふたつの子爵』の二重人格分裂テーマへとつながるものようだ。フィードラー前掲書、256-258頁、および次註を参照。
- 36) ジョン・パース(1930-)は1960年以降、ディケンズふうの構成とポストモダンを標榜する実験的要素をないあわせた「哲学的な神話小説」を世に問いつづけているが、『金曜日の本——エッセイとその他のノンフィクション』所収のエッセイ「ほかの語り方ではほかのストーリーを語らないでほくが語るようにストーリーを語るいくつかの理由」で、双生児にのみ存在するコミュニケーションについて詳述している。パースじしんは二卵性双生児である(姉がいる)。代表作『酔いどれ草の仲買人』では男女ひと組の双生児(兄は実在の詩人エベニーザー・クック)が17世紀末のイギリスと北アメリカ大陸を舞台にくりひろげる冒険物語である。登場人物は多数で、陰謀、変装などが物語の真相をかぎりなく遠ざけ、各所に性倒錯などにかんする猥雑な表象が配置されたこの作品の第3部では、双生児の神話的考察がえんえんとくりひろげられる。また、『びっくりハウスの迷子』所収の短篇小説「陳情書」は、チャンとエン(シャム双生児の名称のもととなった実在の双生児)をおもわせる東洋人のシャム双生児が主人公で、兄は弟の存在を厭い「背中のサル」「おれの影」といって無視し、さいごには弟の存在を否定さえするにいたる。いずれも『気象』との符合は興味ぶかいものがあり、比較検討は今後の課題である。
- 37) たがいに憎みあいながら魅せられてもいるイギリスの黒人双生児ジューン・アリスン・ギボンズとジェニファー・ロレイン・ギボンズ(1963-)は、たがいのあいだでのみ会話をかわし、周囲にたいしては閉じている。ふたりのあいだでかわされている会話は周囲の人間にはほとんど理解できない言語のばあいもあるという。ジューンが独立しようとするのをジェニファーがひきとめるなど、シュラン兄弟に似た状況が多い。マージョリー・ウォレス『沈黙の闘い——もの言わぬ双子の少女の物語』(島浩二十島式子訳、大和書房、1990年)および大澤真幸「もの言わぬ双子の二つの闘い」(『現代思想』1991年7-8月号所収)参照。
- 38) アイオロスは風神で、アイオリア島の王。ヘレン(ギリシアを意味するヘラスの語源である)の子でアイオリス人の祖とされる同名人とはべつ。アポロドロス前掲書、41-42頁および204頁参照。ちなみに『フライデイ』ではフライデイが作るエオリアンハーブ(ガット数本を共鳴箱に張った、風圧でせげんに鳴る弦楽器)がロビンソンの変容の象徴としてあらわれる。Voir TOURNIER, *Vendredi ou les Limbes du Pacifique*, Paris: Gallimard, 1967, p. 171.
- 39) ヘブライ語 ruah は「風」「息」「霊」の意味をもっている。ギリシア語 *φύση* やラテン語 *anima* にも同様の事情がある。
- 40) イタリア語 *colombo* は「鳩」の意味である。この姓をもつイタリア人がポールにわれ知らずある種のヒントをあたえるところから、ノアの方舟にオリーブの葉をくわえてもどった鳩(『創世記』第8章第11節)を連想するのは強引であろうか。

- 41) TOURNIER, *Le Vent Paraclet*, op. cit., p. 252.
- 42) 原初への溯航を体現する「世界創造のまねび」はトゥルニエの作品に頻繁に登場する。前掲拙論 95-96 頁参照。
- 43) ゾウリムシは細胞分裂で増殖する。しかしときに、その分身どうして核の一部を交換しあう。これを「接合」という。
- 44) ウロボロスはギリシア語で「尾をむさぼり喰らうもの」の意味。宇宙の循環と連続の象徴としてさかんにえがかれた。北欧神話のミズカルズソルムルは「まんなかにある庭の爬虫」の意味で、これは世界をとりまく大蛇である。ホルヘ・ルイス・ボルヘス+マルガリータ・ゲレロ『幻獣辞典』、柳瀬尚紀訳、晶文社、1974年、212-214頁参照。また聖書起源のレヴィアタンがみずからの尾をくわえんばかりに円環をつくったすがたであらわされる例もある。フランシス・ハクスリー『龍とドラゴン——幻獣の図像学』、中野美代子訳、平凡社、1982年、82-83頁参照。
- 45) 象のイメージもまた『気象』をいろいろのものひとつである。ラファエル・ガネシャ（後註 75 参照）、ベルナルの牝象アデルなど。
- 46) よく似たきょうだい（しばしば性がことなる）がいれかわるモチーフは「替え玉（影武者）テーマ」のヴァリエーションとして古くから存在する。シェイクスピアの『十二夜』や平安期の『とりかへばや物語』などでは、変身や自己分裂、生の多重性が問われているといえるだろう。
- 47) 大文字で書かれているのは、それが看板であるためというよりも、回文ふうの字づらでウロボロスの円運動のイメージを喚起しているのではなかろうか。
- 48) 『オーヌの王』のなかに *phorie*（かつぐこと）という語が登場しているが、*euphorie*（快意、幸福感、多幸症）からつくった造語らしい。接尾辞-*phorie*の語源はギリシア語 *φορεω*（= *porter*）であり、後述のクリストフォルスは「キリストをになうもの」の意。このフォリーの恍惚（*extase phorique*）の両義性に、危険をはらむ近代科学やテクノロジーの譬喩を読みとろうとする解釈がある。杉田敦「フォリーの身体」、『現代思想』1991年7月号所収、196頁参照。
- 49) ふたごはしばしばその語りのなかで、たがいにあいてに呼びかけをおこなう。
- 50) ヘシオドス『神統記』廣川洋一訳、岩波文庫、1984年、94-95頁、またケレーニー『ギリシアの神話——神々の時代』、植田兼義訳、中公文庫、1985年、260頁参照。
- 51) 聖クリストフォルスの伝説は旧約聖書『士師記』第8-9章のサムソン伝説に負うものである。植田重雄『守護聖者——人になれなかった神々』、中公新書、1991年、17頁参照。
- 52) Voir DAVIS, op. cit., pp. 202-206, et *passim*.
- 53) Voir BOULOUMIÉ, Michel Tournier, *Le Roman mythologique*, op. cit., p. 124.
- 54) Voir Nicole GUICHARD, Michel Tournier, *Autrui et la quête du double*, Paris: Didier Érudition, 1989, pp. 242-244.
- 55) 楽園喪失がこれだけさかんにトゥルニエのなかで変奏され、くりかえし語られているながら、その原因についてのくわしい描写（たとえばミルトンの『失樂園』第9巻のような）は「アダム一家」にも『気象』にも『ガスパール、メルキオール、バルタザール』にも見あたらない。
- 56) 関根政雄訳『旧約聖書 創世記』、岩波文庫、1956年、17頁参照。
- 57) 同上、71-72頁参照。

- 58) 同上, 72 頁。
- 59) プルタルコス『プルターク英雄伝』一, 河野与一訳, 岩波文庫, 1952 年, 「ロームルス」, 67-68 頁参照。
- 60) アポロドロス『ギリシア神話』, 前掲書, 128-129 頁, およびケレーニー『ギリシアの神話——英雄の時代』, 前掲書, 22-25 頁参照。
- 61) ケレーニー『ギリシアの神話——英雄の時代』, 前掲書, 375 頁参照。
- 62) Voir Denis DIDEROT, *Rêve de D'Alembert* in *Œuvres*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1951, pp. 943-945.
- 63) TOURNIER, *Le Roi des Aulnes*, op. cit., p. 12.
- 64) *Ibid.*, p. 302.
- 65) *Ibid.*, p. 13.
- 66) KOSTER, «Les Tours d'écrou selon Michel Tournier» in *Michel Tournier*, op. cit., p. 10.
- 67) 前掲拙論, 94 頁参照。
- 68) 『沈黙の闘い』のジューンはあるとき, 鏡にうつったじぶんの顔がジュニファアの顔になってしまい, 逆上する。ウォレス前掲書, 222 頁参照。
- 69) Voir Françoise MERLLIÉ, *Michel Tournier*, Paris: Pierre Belfond, 1988, pp. 142-145.
- 70) フランス語 *miroir* はラテン語の動詞 *mirari* (驚嘆・崇拜する) に由来する。同根の名詞に *miracle* がある。由水常雄『鏡の魔術』, 中公文庫, 1991 年, 16 頁参照。
- 71) クーセクはあだ名で, 射精することなくオーガズムに達する *coup sec* (邦訳では「空射」) を発明したことからつけられた。彼はのちに精霊論を語るさい, 十二使徒のひとりで, じぶんの守護聖人である, デドモ (ふたご) と呼ばれる聖トマス (『ヨハネによる福音書』第 20 章第 24 節) について, そのかたわれについての説明がないのは, イエスコトマスのふたごの兄弟だったからではないかと語る。
- 72) ガネシャ (ヒンドゥ教の象神) を男性器の象徴として崇拜する友人。
- 73) アレクサンドルはウスタシュの名について, ラフィュー (= *la fille*, 娘) という姓はおかしいが, ウスタシュの名がシュランの姓とたもつ共通性に免じて許すことにするといっている。普通名詞の *surin* は卑語で「短刀」, *eustache* はその名の刃物製造人にちなんで俗語で「木の柄のあるナイフ」である。ちなみに主人公シュラン一族の姓と, 17 世紀キリスト教神秘主義の巨人ジャン＝ジョゼフ・シュラン神父との間に, 関連がある可能性があり, 今後の研究課題である。
- 74) ムリリョはもともと名前すらわからない少年だが, スペインの画家バルトロメ・ムリリョが描いたぶどうを食べる小さな浮浪少年 (ルーヴル美術館蔵の「こじきの子」か?) に似ているためアレクサンドルはひそかにそう呼んでいる。
- 75) 「異性愛的相手が「失われた我が半身である」と云えるならば, 同性愛的対象ではいっそうその通りなのである。否, むしろこの場合は先方は, 自分の原型であり, 理想なのだ。ここでは, 自分を以てそのまま相手に擬せしめ得るという特典がある」(稲垣足穂『少年愛の美学』, 『月球儀少年——極美についての一考察』所収, 立風書房, 1988 年, 331 頁)。
- 76) アレクサンドル叔父のコピー趣味は, 20 世紀に特徴的なキッチュ趣味とは厳密に区別されなければならないだろう。むしろダンディズム特有の無償性と反自然への傾倒 (山田勝『ダンディズム——貴族趣味と近代文明批判』, NHK ブックス,

- 1989年、92-95頁および125-128頁参照)から派生したとみるべきではないか。
- 77) 原文では *ubiquiste*。これはふつうは「キリスト遍在論者 (*ubiquitaire*)」の意味でつかわれるが、ここでは俗意の「どこにでも顔を出す人」に近い。
 - 78) *TOURNIER, Le Vent Paraquet, op. cit., p. 263*。トゥルニエはつづいて、『気象』を読んだあるひと組の男性双生児からの賛意の手紙を掲載している。
 - 79) *Voir ibid., p. 246-247*。
 - 80) アレクサンドルの起用により、小説の構成がややいびつになる危険をおかしたことをトゥルニエは『精霊の風』で告白している。 *Voir ibid., p. 250-251*。またインタヴューで、『気象』はその主題(複数)、錯綜、長さによってじぶんの小説でもっとも野心的なものとして述べている。 *Voir BOULOUMIÉ, «Questions à Michel Tournier» in Michel Tournier. Le Roman mythologique, op. cit., p. 255*。
 - 81) *TOURNIER, Le Roi des Aulnes, op. cit., p. 12*。
 - 82) フィードラー前掲書、278-280頁参照。
 - 83) 『創世記』(関根訳前掲書)、第9章第6-7節、27頁。
 - 84) 前掲拙論、94-96頁参照。
 - 85) アルベルトゥス・マグヌスが奴僕がわりに木偶人形をつかっていたが、騒音がひどく学問のさまたげとなるため弟子のトマス・アクィナスにこわされてしまった、という伝説。種村季弘『怪物の解剖学』、河出文庫、1987年、183頁参照。
 - 86) *Voir GUICHARD, op. cit., pp. 105-109*。
 - 87) *Voir BOULOUMIÉ, Michel Tournier. Le Roman mythologique, op. cit., p. 194*。
 - 88) そのつづきは「そしてたちまち絶対なものになってしまうものによって。とりわけ同性愛者とゴミがそうだ」となっている。
 - 89) 河合隼雄『影の現象学』、講談社学術文庫、1987年、52-53頁参照。
 - 90) ヴィルヘルム・ライヒ『ファシズムの大衆心理』上、平田武靖訳、せりか書房、1972年第3版、246-260頁参照。
 - 91) *Voir TOURNIER, Le Roi des Aulnes, op. cit., p. 378*。またフィードラー前掲書、304-307頁も参照。
 - 92) 阿部謹也「ヨーロッパの宇宙観と差別」、『ヨーロッパ中世の宇宙観』所収、講談社学術文庫、1991年、243-244頁参照。
 - 93) *Voir GUICHARD, op. cit., pp. 52-114*。
 - 94) *Voir David G. BEVAN, Michel Tournier. Amsterdam: Rodopi, coll. «Monographique Rodopi en littérature française contemporaine», 1986, pp. 54-56*。
 - 95) *Voir BOULOUMIÉ, Michel Tournier, Le Roman mythologique, op. cit., p. 189*。ちなみにこれは、英訳では *TURDCO (The Urban Refuse Disposal Company)* となって「さいわいなことに肛門とのつながりをたもっている」(*BEVAN, op. cit., p. 65*。英語 *turd* は「大便」の卑語)。
 - 96) *Voir Georges BATAILLE, L'Érotisme in Œuvres complètes t. X, Paris: Gallimard, 1987, pp. 60-61*。
 - 97) 共同体の規範からの逸脱についての、以下の分類は、あくまで便宜上のものである。赤坂憲雄の「異人」の定義を参考にした。赤坂は異人を、ゲオルク・ジンメルの「異人」やアルフレッド・シュッツが限定した「ストレンジャー」よりもかなりひろくとらえ、あらためて6種類に分類しなおしている。すなわち①漂泊民、②来訪者、③移住者、④マージナル・マン、⑤帰郷者、⑥バルバロス(赤坂憲雄『異人

- 論序説』、砂子屋書房、1985年、15-17頁）。①から③までが定住と漂泊の二項対立を軸にしたもので、本文のi)にあたる。赤坂は⑤帰郷者のなかに、海外帰国子女や復員兵その他の項目とならんで“帰国後のロビンソン・クルーソー”という文字どおりかぎカッコつきの項目を含めている。
- 98) 同様にデフォアの『ロビンソン・クルーソー』第1部を下敷きにした『フライデイ』では、ロビンソンはイギリスに戻らず島にとどまることを決意する。つまり「ロビンソン・クルーソーの最期」は、自作『フライデイ』ではなくデフォアの『ロビンソン』の後日譚とでもいうべきものとなっている。この短篇のロビンソンは、周囲のだれにも理解してもらえない孤独をかかえ、アルコールに溺れている。そこにはむしろスウィフト『ガリヴァー旅行記』最終部の、フーイヌム国から帰って狂的な人間ざらいにおちいったガリヴァー船長（最後の航海で彼は船長だった）のおもかげをすら見る事ができよう。
- 99) ローグル (Logre) は l'ogre (人食い鬼) にちなむ。ここでは柳田國男の『山の人生』などで紹介された山人のような存在である。
- 100) Voir Jean-Bernard VRAY, «De l'usage des monstres et des pervers», *Sud*, n°, 61, 1986.
- 101) Voir Lynn SALKIN SBIROLI, *Michel Tournier, La Séduction du jeu*, Genève-Paris: Slatkine, 1987, pp. 59-64.
- 102) 他者の目を仮定して世界の異化をこころみる手法の歴史はふるい。モンテスキューの『ペルシア人の手紙』では外国人、ヴォルテールの『ミクロメガス』では異星人、ホフマンの『牡猫ムルの人生観』では動物に、それぞれ視点を託している。しかしこういう作品にありがちな傾向として、語り手は観察するばかりで、語り手が観察する人物たちの視線が語り手を逆に観察することがきわめてすくないという特徴がある。これは『ムル』を読めばわかるとおり、視点は猫にあるためきわめて自由で、なかば神の視点となってしまう、最終的に異化の衝撃力は限定されてしまう。三人称描写の変形になりかねないのである。その極端な例がヴィルヘルム・ブッシュの『エドゥアルトの夢』(1891年)で、ここでは主人公は「点」になってしまい、もはや透明人間にひとしい。ここでトゥルニエの語り手たちがしばしば異形であることの特徴があかされる。かれらは怪物であり、つねにひとびとの好奇と畏怖がないまぜになった視線にさらされる、エロティックで神聖な存在である。語り手は「観察する」まえに「観察される」。そしておもむろに、共同体がかれらにむけるまなざしそのものを分析してみせるのである。『ミクロメガス』や『エドゥアルトの夢』の主人公が文字どおり「われ」をわすれて観察する機械となりはてるいっぽう、トゥルニエの主人公は自意識過剰に——じぶんたちがいかに「正常な」社会からきびしく峻別されるかに敏感に——なる。おなじ構造をもった作品にラウクラフトの「アウトサイダー」がある。
- 103) ポーは『N・P・ウィルス論』において、ギリシア神話中のグリュプスをひきあいに出し、その各部分（鷲の頭と四肢の胴体）が実在すると説きながら、新しい概念とはひっきょう、それまでに見られなかった結合の謂であると論じている。平井啓之によればこれは、サルトルの想像力論をさきどりしたものである。平井啓之「文学と疎外」、『文学と疎外』所収、竹内書店、1969年、169-171頁参照。
- 104) ホメロス『イーリアス』上、呉茂一訳、岩波文庫、1953 / 1964年、225-226頁。